



漫画家・アシさんに
聞いてみた



第2巻 樹崎聖先生
編

ヒカル (from プロジェクト
乙)

序章～登場人物～

都内、新宿駅から三鷹の森の少し手前JR高円寺駅――。

駅の目の前には漫画が読んで描ける漫画喫茶、「漫画空間」がある。今回のインタビュー場所はここである。

樹崎先生と店前で合流し、インタビューに移る――。店内には既に絵を描いている方が数名……、そして深谷先生も自身の原稿にペン入れを行っていた。各々が自分のペースで作品制作を進めている。

漫画空間の店長である深谷陽先生が淹れてくださった紅茶を飲みつつ、インタビューは始まった。

【ヒカル】

今回はよろしくお願ひいたします。

【樹崎】

こちらこそ、よろしく。

【今回の登場人物】

樹崎聖先生（漫画家）

経歴：週刊少年ジャンプにて『ff(フォルテシモ)』にて、ホップ☆ステップ賞を全項目満点で受賞した。その後、ジャンプでの連載『ハードラック』、『とびっきり!』を終えた後にはスーパージャンプ紙面にて『交通事故鑑定人 環倫一郎（全18巻）』を長期に渡り連載する。以後、アフターヌーンにて『ZOMBIEMEN（以下、ゾンビメン）』を不定期連載。現在では漫画業界の活性化のため漫画元気発動計画を主催し、電子書籍Domi xの編集も兼務している。

深谷陽先生（漫画家）

経歴：元特殊メイクアーティスト。現在では漫画空間：高円寺店にて店長に就任している。樹崎先生曰く、日本で3番目に絵がうまい漫画家さん。

ヒカル(インタビュアー)

経歴：電子上にてインタビュー記事などを掲載している関西在住の21歳。詳しくは私のTwitterなどへからどうぞ。

Twitterアカウント @fasdrew

Q：同期（自分とキャリアが同じくらい）に絵がすごく巧い人がいると、プレッシャー感じますか？

その他、先生の学生時代～連載デビューまで

【ヒカル】

では早速、インタビュー始めていきます。まずは軽い質問から……。

自分の同期（デビュー時期なども近い）に絵が凄く巧い方がいるとプレッシャーを感じる
ことってありますか？

【樹崎】

プレッシャーですか……。

まず高校、当時3年生のときにナカタニD.っていう奴と出会ったんですね。美大の予備校に通い
始めたら、彼は高校生なのにプロ並みに絵が巧かったんですよ。

抜群の迫力と美しい線があって。まあ当時はデッサンすると、彼の絵もデッサンとしての絵
ではなくて、彼もまだまだ（デッサンの絵は）巧くはなかった。デッサンではいい勝負だっ
たんです。ただ、これが漫画を描くとなると彼と僕には大きな差があって、「これは天性の
才能だなあ」って感じたなあ。

【ヒカル】

やはり高校時代でもナカタニさんの様に飛びぬけた実力の持ち主はいて、年齢関係なくそう
いう人は凄い実力を持っているんですね。

【樹崎】

そういう人はいますね。

ナカタニとは一緒に夏休みは東京のレベルの高い予備校に行ってたんです。そこで、ついで
にジャンプや何誌かに持ち込みに行ったんです。そのとき、ナカタニには担当がついたんで
すけど、僕は鼻も引っ掛けられなくて（笑）

【ヒカル】

普通は何回も持ち込んだら、担当がつくんでしょうか？

【樹崎】

いや、ナカタニの様に最初から能力が高ければ、担当は一度でもつきますよ。その時は僕の実力がその域まで達してなかったの・・・。

【ヒカル】

なるほど……その後、高校を出てデビュー作『ff（フォルテシモ）』になるわけですか？

【樹崎】

いや、そのあとはまだまだ長い時間がかかります。大学に行きましたし。

【ヒカル】

先生は大学では漫画同好会などに入っていたらっしゃいましたか？

【樹崎】

大阪芸術大学には『アオイホノオ』にも出てくるCASっていう有名な漫画・アニメの研究会があるんです。

僕も当時はそこに名前だけは所属していました。……っていうのも克・亜樹さんもCASに所属していたんです。克・亜樹さんのことは僕も尊敬していたんで、克・亜樹さんと会うためだけに、しょっちゅう部室の前にだけは顔出していました。

【ヒカル】

漫画『ふたりエッチ』で凄く有名な作家さんですよ。コンビニでコミックスよく見かけます。

【樹崎】

ただ僕やナカタニからしたら、漫画家っていうのはカッコいい仕事であって欲しいという考えがまずあったんです。漫画家＝いじめられっこという風潮もありがたくなかった。

アニメとかが流行り出して気持ち悪いオタク野郎がどんどん増えていた時代でね……そういう新しいオタク層が許しがたい時期が僕にはあったんです（笑）一般人から見たら自分も大差なかったとは思いますがね。今は「そういう人こそありがたいお客さまじゃん」って感謝すらしてるしね（笑）

【ヒカル】

80年代後半は一般にもアニメが浸透してきて、軽い感じでアイドルやアニメに入ってくる時代とお聞きしています。

（そういう文化がポピュラーになったというべき？）

【樹崎】

そうですねえ……。

僕やナカタニは世代的には第1次オタク世代で、僕らが中学ぐらいに『宇宙戦艦ヤマト』が映画化されヒットし、ガンダムが始まっているんです。だからそのあたりの作品の影響を凄く受けて熱中しているんです。

だからオタク第一世代としては、最初に本当に面白いモノ（アニメや漫画）ってジャンルを見つけたのは僕たちだ！っていう意識を持っていたし、さらに言うとオタク第一世代は自分の目でいいものを見つける能力がある人だったので

そんなには気持ち悪くはなかったんです。気持ち悪いにしても質がちがったというか（笑）。

【ヒカル】

僕は当時を生きてないので詳しいことは分からないのですが……。

第1次オタク＝SF論や未来などの話題で盛り上がる。

第2次オタク＝キャラの表現（可愛さ）などを仲間内で語り合うことが増えてきた。今で言う、「萌え」に路線変更してきた。

……こんな印象を受けるのですが、合ってますか？

【樹崎】

うん、まあそんな感じかな（笑）

僕も第2次オタク世代の文化は好きだったんだけど、それを表に押し出すのはどうよ？ ……とはあの頃、感じていたんです。

だから第2次オタク要素が強かったCAS内での会話にはあんまり割っては入れなかったなあ。彼らはアニメが好きだけで漫画家もアニメーターも目指していない連中だったんですよ。

【ヒカル】

作品を見る専門の人達が大半を占めていたんですね。

【樹崎】

そういうぬるま湯な空間に入りたい気持ちもあったんだけどね（笑）。

でも僕は漫画家になりたかったから、それは駄目だと思い、遠慮した。

【ヒカル】

そういう場に入ると自分が駄目になると感じたんですね。

【樹崎】

そうなんですよね。それは駄目だと思い、輪の中には入らなかった。

で、僕は覚えてないんですけど（笑）。克・亜樹さんに「どうして克さんは、あんな奴らと一緒にいるんですか？」って言っちゃったらしいんです。僕は覚えてないけど（笑）。

【ヒカル】

だいぶ、ぶっちゃけましたね(笑)

【樹崎】

でも、克さんの中ではそのことで「樹崎は漫画への情熱が凄いある」というを思ってもらってるみたいなんだけどね（笑）

僕はそんな酷い事言った覚えはないんですけどね（笑）

【ヒカル】

克先生は今では超有名漫画家さんですもんね。

克先生は、そのあと本格的にデビューという形でしたっけ？

【樹崎】

克さんは僕が知り合ったとき、既にデビューしてて大学中もずっと月間連載していたね。

で、卒業後にさらに週刊連載が増えてましたね。月間連載中には僕もたまに遊びにお邪魔するついでに、たまにアシスタントしていました。本格的はアシスタントではないんですけど。助っ人みたいな感じです。

【ヒカル】

先生は本格的なアシスタント（同じ先生の元で、数回単位の作画補助）は経験していないんですよね？色んなところで助っ人のようにアシスタントしてから連載に至ったとお聞きしました。

【樹崎】

そうですね。色んな先生のところで助っ人でアシスタントしました。次原先生（代表作：『よろしくメカドック』）のところでは2週だけだし、他の先生の現場でも同じような感じでちょこちょこアシスタントしていました。

次原先生のアシスタントをしていたときはデビュー作の『ff』も完成して、結果待ちの状態でした。そのとき、原稿の背景のビルに「ff」って文字を入れたりね（笑）

『スーパーパトロール』の第1話だったかなあ……忘れてましたが、書き込みました。消されてる可能性もありますけどね。みんな、そういうことをやりたがるので（笑）。大体、怒られるんだけど僕の『ff』はまだ世に出ていなかったのだから、まあ描いてもバレないだろうと思ってね。本当はやったら駄目だよ（笑）。

【ヒカル】

昔のコミックスとか読むと他作品のキャラを無断で使ったり、随所に遊びのような落書きがあつたりしますよね。

【樹崎】

当時は今より規制が緩くて、著作権にうるさい人がいなかったから……そういうことはよくありました。

【ヒカル】

高橋留美子先生のラムちゃんっぽいキャラが古い別の漫画に出てるのも見たことがありますし、そういう雰囲気は昔の漫画ならではですよね。最近は著作権が厳しくて、他作品のキャラの名前を出すだけでもアウトっぽいんですけど。

そのアシスタント経験後は『とびっきり！』や『ハードラック』を連載に入っていた感じでしょうか？

【樹崎】

そんな感じですね。その2作品の間にもアシスタントしたこともありましたけど。

思い返すと、大学には克・亜樹さんやナカタニDの他にも田中政志（代表作：『ゴン』）さんもいたし、meimuさんもいたし他にも沢山デビューした人がかなりいましたね。

【ヒカル】

色んな方々が大阪芸術大学から巣立っていった時期なんですね。

【樹崎】

結構な大物が多く出た時期でしたね。そのときは作品しか知らなかったけど、庵野監督もいた。

庵野監督の『帰ってきたウルトラマン』知ってますか？

あの作品の巨大なモノの見せ方に影響を受けてね。あれを見てから、ずっと巨大なモノを描きたいと考えていたんです。で、だいぶ後に描きました（笑）

Q：映像メディアについて

【ヒカル】

先生は今では映像、漫画、音楽を組み合わせ作品作りを手がけていらっしゃると思いますが……大学在学中は映像メディアに進もうとは考えていなかったのですか？

【樹崎】

僕はチャップリンの『独裁者』に影響を受けたんです。おばあちゃん子だったのでハリウッド映画だとか外国の映画を、おばあちゃんと見てたんです。父親や母親にかまってもらえなかったから、おばあちゃん子ってことでもあるんですけどね（笑）

なのでおばあちゃんの世代でも馴染みのあるチャップリンが好きで、一緒にチャップリンの映画をおばあちゃんと見ていました。

中学2年のときに『独裁者』でのチャップリンの演出（普段喋らないチャップリンが喋る）に刺激を受けてね。『独裁者』はヒトラーが勢力を伸ばしていた時代に、ユダヤ人のチャップリンがヒトラーを皮肉った映画を作ったんです。

チャップリンは基本的に体の動きだけで表現する方なので、普通は映画内で喋ったりしないんです（同時期の映画では、もうサイレント映画の時代ではなく俳優のセリフ付き映画があったのにも関わらず）。なのに、この『独裁者』という映画ではチャップリンは喋るんですよ。最後に一気に長々と演説をして、それが映画の締めになるんです。作品でヒトラーと戦い、平和を謳っているんです。

【ヒカル】

それは痺れる演出ですよ。

そういった映画から刺激をもらうことは多いですか？

【樹崎】

そうですね。映画からは影響を受けやすいもので。

【ヒカル】

そこにいくと最近、僕の周りの話になるんですが、世間一般的に洋画映画は見てないけど、アニメだけはずっと見ている人も増えているような印象を受けます。

もしくは昔の古典的な作品を見ていない人も増えているように感じます。

樹崎先生としてはやはり、映画（洋画など）をどんどん見て欲しいですか？

僕個人としては当然、アニメも好きですけど映画から学べることも多くあるので。漫画家志望の方だとか、芸術に関わる人ならば古い洋画もジャンジャン見たほうが良いかなあとは思いうんですけども……。

【樹崎】

はい。そうですね……。

僕はチャップリンの映画を見て、「こういうチャップリンみたいな生き方をしたいな」と思って、そこが自分の活動にも繋がっていると思うんです。映画を創る機会があれば、映画もしていたかもしれない。

でも、当時の日本映画って目指したいとは思えないくらいには最低……だったので（笑）

【ヒカル】

80年代には僕は生まれてはいないですけど、その時代は映画業界が斜陽（？）だったのかなあと考えています。

リアルタイムで経験していないので、分かりませんが。

【樹崎】

斜陽ですね。『セーラー服と機関銃』よりも少し前ぐらいの日本映画です。

当時は映画監督になれる人は完全に年功序列や学閥重視だったので……、その結果なのか酷い出来のモノが多かった。

映画における才能が重要視されない時代だったのかもしれないですね。その時代の邦画はB級すぎて笑えるところもあるんでタランティーノなんかには愛されてるわけだけどもね（笑）

昔の邦画は今見れば、違う意味での味はあるんだけど同時期のハリウッド映画と比べると熱意に雲泥の差があって、酷かったんです。

【ヒカル】

海の向こう、ハリウッドでは豪華なセットや撮影機材で撮っているのに……こちらでは限られた資材で勝負。そこで創意工夫もない商業重視な作品ばかりになると、見てられないわけですね（勿論、そうでない素晴らしい出来の作品もある）。

【樹崎】

ハリウッド映画では『スターウォーズ』、『未知との遭遇』などでスピルバーグやルーカスが台頭してきたわけです。

『レイダース』のような格好良いアクションもありましたから。でも日本ではTさんのB級ア

クシヨンなんです（笑）。

【ヒカル】

80年代も後半になると、海外ではCG技術も使い始めようというときでしたから、どうしても見栄えに差は出ちゃうかもしれないですね……。そこで先生は漫画で作品を表現するに至るわけですね。

【樹崎】

そうなんです。ハリウッド映画みたいなことを日本でするにはどうしたらいいんだろうと考えたときに

「日本人には漫画があるじゃん」って思ったんです。

【ヒカル】

そこが先生の漫画の原点になったのですね。

【樹崎】

そこが僕の原点ですね。当時は絵はそこまで巧くなかったけど。それでもクラスで2番目くらいの自信はあったけどね。高校では学校で1番巧いと思ってたけど（笑）

でも美術系の受験予備校に通いはじめてみると、僕は最下位くらいに下手くそでした。またその予備校が特別レベル高かったんです。

【ヒカル】

やはり予備校とかはレベルの高い子が集まりますもんね。当時って、そういう美術系の予備校は多かったですか？

今でこそ漫画入門コースみたいな教室もありますが……。

【樹崎】

当時でも芸大、美大とかに行く人は、そういう予備校だとかに1年くらい通ってましたよ。漫画の学問はありませんでしたが。それでも芸大だと7~20倍くらいの倍率だったと思います。本音を言うと、東京の大学に行きたい気持ちはありました（笑）。絵の勉強はすぐには活かさないかもしれませんが基本からやることが重要ですね。

【ヒカル】

中には美大や芸大を経由せず、漫画業界に入ってきた先生方もいますよね。次原先生も理工

系の学科卒業と聞いてます。

【樹崎】

そうですね。芸術以外の学科卒業だと、色んな知識を得られますからね。マンガ学科に入るのには本当に得なのかっていう疑問は僕も持ってます。

でも今時の漫画学科を開いている大学はレベル高いみたいですよ。何より良い仲間に恵まれて、切磋琢磨できるメリットがありますよね。

先日、よしまさこ先生とお話したんですけどね。よしまさこ先生の教室の生徒さんは本当にレベルが高いんですよ。僕の教え子もかなりの確立で漫画家としてデビューしましたが、よしまさこ先生の大学のデビュー率の高さには負けるなあって思います。

【ヒカル】

やはり絵は良い仲間がいると、より成長しますかね？

互いの絵を見て、学びあったり。絵の力って、自分では気づけなかったりしますもんね。勘違いしてしまったり、逆に人の原稿ではあざとく弱点を見抜けたり……。

【樹崎】

そうですね。……でもどうしても専門学校という空間では、やる気のない奴が出てくるんです。そういう子がいると、足を引っ張るんです。教室の雰囲気も大学の方が意識のレベルは高いかもしれませんね。

【ヒカル】

そればかりはどうしようもないですもんね。

専門学校だと、中には大学に行けるほど勉強してないけど、働く気もないので……、とりあえず専門学校に来る人もいるでしょうし。勿論、やる気が凄い人もいるでしょうけど。

【樹崎】

やる気のない奴に、やる気を教えるのは不可能ですからね（笑）

【ヒカル】

絵にはそこまで興味ないけど、とりあえず入学だけした人も多いのかもしれないね。今時は大学でもとりあえず入学だけしたという人が大半ですし……。

【樹崎】

僕が講師時代もそういう人もいましたよ。

講師2年目には投稿クラスってものを作ってもらいました。本音を言わせてもらおうと、講師としてもやる気がない人には教えたくはないですよからね（笑）
やる気がない人の面倒を見るのは、サービス業ですから。
漫画家を目指すということを体験してもらおう。……っていうところで終わることを教えるのはつまらないので。

【ヒカル】

最初からやる気がない人も多かったですか？

【樹崎】

ただ最初に学校に来たときは、皆やる気はあるんです。

そこでやる気を無くさないうちに、基礎から教えてあげれば大丈夫とは思いますが。最初は2年生と1年生の授業を受け持ったんですけど……2年生には既にやる気の無さが植えつけられていたんです。でも、1年生の子はかなり食いついてきてくれたので、かなりの子がデビューしましたよ。4人は連載を持って、単行本まで出した子もいますから……教え方次第だと思いますね。

Q：漫画元気発動計画の起こりについて――

【ヒカル】

先生は今、漫画元気活動計画やDomix、姉つくすなどネットや映像方面での活動が非常に多くなりましたが、このような企画はいつごろから始まったのでしょうか？漫画家さんやアシスタントさんはどちらかと言えば、メディアへの露出を嫌がる方も多いとは思うので。先生みたいにメディアに進んで出て行く方は多くはないとは思いますが……。

【樹崎】

元々はmixi（SNS）からですね。そこで漫画家の友人が出来ていくのが楽しかったんです。根はオタクですから好きな漫画家と話せるのは楽しくて……

【ヒカル】

なるほど、始めはSNSからスタートだったんですね。
最初は割と軽いノリで始めたんでしょうか？

【樹崎】

順を追って話しますと……、SNSを始めたときは僕は専門学校の講師をしていたんです。SNSでは漫画家さんの知り合いが多かったんですが、講師としての体験記みたいなものをSNSの日記に書いたら凄くウケてたんですね。そうして、友達もドンドン増えていったんです。

僕はそこまで一般に知名度のない漫画家だと思うんですけど、僕はデビュー当時は『ff』という作品でジャンプの賞を全項目満点で受賞したので、ある一定の年代の作家からしたら一時期の僕はベンチマーク的なポジションでもあって、一瞬だけ憧れの的であったようなんです。

それもあって漫画家さんの間ではそれなりに知名度があるようなんです。一般には知られていないのに（笑）けど、そういうことがあって漫画家さんの知り合いが増えて行ったんですね。

【ヒカル】

SNS上で徐々に横の繋がりが拡散していったのですね。

【樹崎】

中には「実際、会ってみよう」とまで言ってくれる人も多かったんです。でも、当時の僕はそこまで行くとメンドくさいとも感じたし、コミュ障だし人と喋るの苦手だし（笑）

【ヒカル】

いやいや、先生はとても社交的ですよ。

【樹崎】

今は随分、慣れてきたんです。講師時代に色んな人と話して、人前で喋るのも慣れてきたんです。でも、未だに頭の中が真っ白にもなりますし、どもりますから……（笑）

関西出身なので、関西弁ならまだマシなんですけどね（笑）

【ヒカル】

僕も関西人なので分かります（笑）

今日、東京に着いたら当たり前ですけど標準語の人ばかりで「うわあアウェーな環境や」って思いましたもん。

【樹崎】

で、そういう人たちとでも一度に会ってしまえば楽だなあと思って、規模は30人くらいのオフ会を開いたんです。

そしたら、結構評判が良くて……。 「またオフ会してくれ」という声も多かったんです。でも毎回、幹事はしんどいので人がやってくれるならという感じで、発起人という役職をもらって（笑）

【ヒカル】

そして、さらに回数も規模も増えて行ったんですね。

【樹崎】

それが年に1、2回ぐらいはオフ会を行うようになりました。

人数もあつという間に100人超えました。そこで人の繋がりが広がったんです。それ以前に漫画業界の友達が多いというわけではありませんでした。

【ヒカル】

それ以前は漫画家さん同士の横のつながりはなかったのでしょうか？

【樹崎】

ネットもないし、出版社が漫画家さん同志のつながりを良く思ってなかったのも……。漫画家の横の繋がりはなかったです。今はそんなことはないですけどね。会う機会がほとんど無かったんで。

【ヒカル】

昔は本当に仲が良い漫画家さんとたまに会うか、新年会やパーティで他の作家さんと会う程度だったんでしょうか？

【樹崎】

そうですね。僕はジャンプ系列の人しか面識なかったですね。他の出版社は完全に別世界ですね。関わりがほぼなかったです。

【ヒカル】

90年代では作家さんが他誌で連載するってのも、あんまりなかったですか？
今じゃ作家さんの移動もよく見かけますけども。

【樹崎】

そうですね。ネットとか出てきてから、情報が広がりましたから。
けれど今でも人気作家さんが他誌で連載持つのは難しいですよ。
例えば、とある出版社Aの作家さんが他誌Bのマンガ賞を取ったときなんて、授賞式ではしっかりガードされてますからね。

【ヒカル】

引き抜かれないように……。ですね。

【樹崎】

まあでも裏から他誌のマンガ賞をもらえるということは、「次はうちの雑誌で連載してね」という出版社からのアプローチがこっそりあったりするらしいです（笑）
そのあたりは編集者の噂話を真に受けた憶測なので真相は分かりませんが（笑）
マンガ賞はほとんど自社に所属する漫画家さんにしか与えることはないのも……。けれど、個人的にそれは間違っただシステムだと思いますので……。そこは批判しておきたいことですね。

【ヒカル】

なるほど、例えばなんですが……。とある少年誌（A）の連載作品が他誌（B）のマンガ賞を取

るのはそんな難しいことなんですか？

【樹崎】

滅多にないことですよ。

大抵は自分の雑誌で連載している作家さんだけです。

とある雑誌で連載していた漫画家やぶのてんや先生が他誌のマンガ賞を受賞したんですね。やぶの先生は編集には、「受賞の候補になってるらしいけど。かませ犬になるかもしれないし、断っとく？」と言われてたらしいんですけど。

やぶの先生は「いや、かませ犬でもいいんで受賞候補に残しといてください！」って言ったら、結果として受賞に繋がったらしいんです。だから、それぐらい業界の多くの人間は「他誌でのマンガ賞受賞なんて無理だ」と思っているんです。

【ヒカル】

現状では全ての出版社の作品から受賞作を決めるマンガ賞は多分ないですよ。

「このマンガが凄い！」っていうアンケート本(?)のようなものはありますが……今のお話を聞いた限りではそういう類のマンガ賞はなさそうです。

【樹崎】

書店が決める賞とか、公平に扱おうという本はいろいろありますね。

【ヒカル】

そこで全ての出版社、雑誌が共同出資して一大マンガ賞を作ると楽しそうですね！

そこで1位だとか2位の漫画は当然、注目されますし。

【樹崎】

これだけ出版不況なんだし皆で手を組んでもいいはずなんだけどね。

【ヒカル】

先生がおっしゃっていたのをお聞きしたのですが、やはり日本の少子化だとかで漫画なども売れなくなってきてますもんね。

そういうどうしようもない流れ(少子化)があるなら、新しい取り組みが必要かもしれませんね

【樹崎】

そういうマンガ賞で日本を代表する漫画を決めて、世界に売り出せばいいとは思いうんですけ

どね。

【ヒカル】

実際面では難しそうですか？出版社が手を組むのは。

ニュースで一部の出版社のプロダクションが合併したとかは稀に聞くんですけど、多くの会社はまだまだ独立して出版している形ですし。

【樹崎】

昔よりかは出版社同士で手を組んでますよ。単行本のフェアを2社で行ったりもしてますから。

まあ……でもやっぱり、そういうことは難しいでしょうね。

【ヒカル】

単行本の話になりましたが、先生の短編集『ff』は長い期間ジャンプコミックスのカバーなどのコミックス情報欄に掲載されていたのを覚えています。『ff』は短編集としてかなり売れたり、話題になったりしたのでしょうか？

なかなか短編集の話や売り上げについて聞くことがないので。特に今は少年誌から短編集はあんまり出ない印象ですし。売上とかが良かったんでしょうか？

【樹崎】

いや、そんな売上だとかが良かったとは聞かないけど。

ジャンプのマンガ賞で全項目満点で入選は多分『ff』だけなので。いきなりの本誌デビューでしたし……受賞時も誌面では異例の見開きでの受賞発表されて、破格の扱いではありましたね。それもあって色んな人の印象には残った作品にはなったと思います。

当時としては色んな意味で新しい漫画だったので……新人で見開きページを使うのがほとんど許されない時代でしたので。

【ヒカル】

そうなんですか？

見開きを使うことが制限されたりしていたのでしょうか？

【樹崎】

編集さんからは、「ページが短いのに、ページ数を食う見開きを使うな」的な指摘はありましたね。

僕も当時は「見開きはいらないだろ」と言われたんですけど。僕は「いや、絶対に見開きが

表現として必要だ」って自分の意見を押し通しました。見開きは削らないでそこを引き立てるように他を直したら何も言われませんでした。

【ヒカル】

新人の見開き使用についても今と昔では違うんですね。

【樹崎】

何せ新人の投稿作だったから、見開きよりも内容を詰めることを求められてたんですね。さらに言うと僕は『ff』に色んな試みを盛り込んで、青年漫画では江川達也先生がやっていたみたいにフリーハンドでの効果線をさらにグチャグチャに入れてみたり……、そもそも漫画の題材自体もクラシックピアノだったんです。

音楽を扱うこと自体が間違っていると言われた時代です。クラシックピアノを少年誌でやるのは相当常識はずれなことではありました。

【ヒカル】

90年代ごろはバトル漫画でトーナメントが流行ったり、超能力バトルがメインでしたもんね。

【樹崎】

うん。だからこそ、クラシックピアノという題材で作品を描いたことは、漫画志望者の人たちの心に刺さったと思うんです。

【ヒカル】

先生は最初から、普通の投稿作品とは違う方向性で作品を描こうと決めていたんですか？

【樹崎】

勿論、普通にやっては駄目だと思っていました。

ナカタニD.や克・亜樹さんを見ていたので、僕も工夫しました。ナカタニの描く線の凄さや克さんの描く物量に対抗するために、自分にできることを探したんです。他の人でしてない、できていない部分をやらなくちゃいけないんで。

普通の作品を描いても駄目、迫力のある線で勝負してもナカタニの線には勝てない。僕にとってのベンチマークはナカタニだったんです。あいつを超えるにはどうしてやろうといつも考えてたんです。

【ヒカル】

その試行錯誤の末にクラシックピアノを題材に、見開きを使うなどの創意工夫が生まれたのですね。今でこそ、青年誌では『ピアノの森』みたいにピアノを題材にした漫画も増えましたが、当時は他にそういう漫画はなかったんですか？

【樹崎】

青年誌でも、そういう漫画はなかったと思います。

「漫画で音楽を表現をするって、どうなの？」みたいな時代だったので「音のでない漫画で、音を表現するのは変じゃないか？」と考えられていましたから。今となっては、そこが漫画の表現の面白みだと分かってるんだけどね（笑）

【ヒカル】

そこは先生がデビューした80年後半～90年前半ごろでは漫画界でも「こういうことを描いた方が良い」という流れがあったんでしょうか？

一般にも知られている話だと、『北斗の拳』が流行った後には劇画の作品が増えたとか聞きます。もしくは編集さんから絵柄などで指示を受けたことはありますか？「美少女を出せ！」だとか……。

【樹崎】

いや、僕は『ff』を描いていた頃に編集さんから「君は男を描く漫画家だから、女性キャラを出さなくてもよい」と言われてましたよ。

内面の描写まで含めての話になりますが、そもそも今みたいにカッコイイ男性と可愛い女性のイラストを両方ちゃんと描ける作家さんが圧倒的に少なかった時代なんです。

現代では男性キャラも女性キャラも描ける作家さんは普通なんですけど、昔はそれができる作家さんが少なかったんです。

【ヒカル】

そうなんですか！それは初めて聞きました。

【樹崎】

でも僕は可愛い子を描けないことが悔しくて、意地になって凄く練習したんですよ。

それで初連載の頃には、当時のジャンプでは可愛い女の子を描く作家の第一人者だった金井たつおさんっていう可愛い女の子を描ける作家さんが、僕の描く女の子を可愛いと言ってくれるまでのレベルに達しました。そしたら担当さんも「女の子もバンバン描いていいよ」と言ってくれるようになりましたね（笑）

連載では女性キャラを描くようになりましたよ。その時代ごとに色々な風潮はありますか

らね。

【ヒカル】

今はそういう風潮はないですよ？たぶん。

【樹崎】

うん。まあ担当さんによっては色々あるでしょうけど。

結局のところ人次第だから。僕の担当さんがそうであっただけかもしれないし……。そもそも担当さんに言われたからと言って、100%直す必要はないんですよ。

指摘されたら、どっかしらは悪い部分があるので直すべきなんだけど……。自分がやりたいことに関しては決して曲げる必要はないんです。このことについてはトキワ荘プロジェクトさんが出した『マンガで食えない人の壁』って本でも言及しています。

狙ってそういう構成にしたはずはないのに多くの作家が経験談として違うエピソードで同じ話をしています。

【ヒカル】

担当さんの意見も上手に取り入れて、自分の持ち味を活かすということですね。

【樹崎】

先日、新條まゆ先生とネット上の番組で対談したんですけどね、新條先生もやっぱり同じようなこと言うんです。売れてる漫画家さん、いや生き残ってる作家が皆同じことに行き着くのかな……。

「自分のやりたいことは決して崩さない。でも言われたまんまで置いといても良いわけではない」

【ヒカル】

中には迷走しちゃってる人もいますもんね……。読み切り作品見るたびに方向性が違う方に伸びている人だとか。

【樹崎】

自分の描きたいことを見失ったら、モチベーションや情熱も消えて失せてしまうじゃないですか。それこそ何のために漫画家になった理由が分からないってもんです。

それで1流になれるわけもない。何かを言われたら、「自分の伝えたいことが伝わってないんだ」と反省して、どうしたら伝わるのかを考えなくちゃいけないんです。

【ヒカル】

担当さんから意見をもらい、でも自分の中で芯となる描きたいこと。それを自分の中で上手く調理して作品を完成させる。これが漫画家として成功する秘訣なのですね。通過点とも言えるかも。

【樹崎】

これはそれほどにどの作家さんも言うことなので、一番大事と言ってもいいことなんじゃないかと思うんです。まあ担当さんがついてからの話にはなるんですけども。

【ヒカル】

担当さんとうまくやっていくコツとかありますか？
時代によっても変わるとは思うんですけど。

【樹崎】

んー、まあ良い編集と悪い編集どちらに出会うかは分かりません。漫画をずっと見てきた点に関しては多くの編集よりも漫画家の方が上だと僕は思うんです。

だから間にうけすぎない。でも他人・第3者の目は必要です。大抵の出版社の人間は勉強ができて常識がある人だから、そういう目線は入りますよね。でも頼りになる部分とそうでない部分がある。100%信用しろとは言いません。でも仲良くするにはとにかくコミュニケーションはちゃんと取りましょう（笑）

「こいつと仕事していこう」と思ってもらわないと、そもそも使ってもらえないですから。

【ヒカル】

どんな仕事でもコミュニケーションは大事ですよ。

【樹崎】

「コミュニケーションが凄く大事」っていう作家さんは多いですよ。僕はそこまでコミュニケーションを意識してないですけど、全然喋れないのは良くないと思います。

中にはそういったところを凌駕する人もいますが、それはごくわずかの選ばれた天才ですからね（笑）

【ヒカル】

それは生まれついて、凄くスペックが高かったり……個性がとんでもなく強烈な人ですよ。

【樹崎】

「最初から人の言うことは聞かない」っていう人ではなくて。「人の言うことを聞けない部分」を持っている人が天才だと思います。

天才といえば、今や『ジョジョの奇妙な冒険』で有名な荒木先生はデビュー作『魔少年ビーティー（以下、ビーティー）』は正直かなり下手なんですけど、当時の漫画家志望者の中では「これは凄いな、新しい」という評価を得たんです。

【ヒカル】

……と言いますと？

Q：キーワードは「ギョッ！」……読者の度肝を抜けっ！

【ヒカル】

荒木先生の連載デビュー作『ビーティー』はそれほどまでに画期的だったんですか？

【樹崎】

デビューしたての頃の荒木先生ですから

『ビーティー』はクールな作風ではあるんですけど内容が伴ってなかったりしてるんですよ。絵はまだまだ巧くないし、キャラは斜め立ちしてる。ただ、とにかく心に残ったんです。

「これは凄いな」……と。多くの漫画家志望者の家には『ビーティー』がありましたよ。そこから荒木先生がすごいのは、あの特徴的な斜め立ちを直さなかったんですよ。

【ヒカル】

斜め立ちは荒木先生固有の表現ですよ。

【樹崎】

担当さんなどに斜め立ち（人物が傾斜のない地面に対して、斜めに立っている）なんて、「なんでキャラが斜めに立ってるの？直したほうがいいんじゃない？」って絶対に注意されると思うんです（笑）

でも明らかにおかしくても荒木先生は直してないんです。

【ヒカル】

でも先生は未だにキャラのポージングや立ち姿を斜めにしていますよね！

上手くいけば、そういう表現も持ち味（個性）になるということなんですね。一見、弱点に見えても貫き通して昇華していけば個性になってしまうわけですか……。

【樹崎】

そういうことですよね。

悪いとこ全て直すということは個性が失われることでもありますので。

【ヒカル】

新人さんの読み切りでも絵は下手だったり濃いすぎても、その作品は印象に残ります。そこで絵も話も平凡だと僕ら一般読者からすれば、微妙な印象を持ちます。

【樹崎】

自分にとって何が武器なのかを理解できるいいんですけどね。『10年大盛りメシが食える漫画家入門』でも書いたんですけど、現代でモノが売れる要素って「ギョッ！」とすることが重要なんですね。

【ヒカル】

インパクトが重要なんですね。

【樹崎】

まさに荒木先生が出てきたとき、僕らは「ギョッ！」としたわけです。元を辿るとジャンプという雑誌もそうだと思うんです。革命的なことや、新システムを打ち出す。良い意味でゲリラ的なことで、ジャンプはのし上がっていったはずなんです。

【ヒカル】

衝撃でいうと、車田正美先生の登場も漫画家志望者にとっては鮮烈だったのではないのでしょうか？

【樹崎】

そうですね。

先生の代表作である『リングにかけろ』も初期は割と普通のボクシング漫画で、あんまり面白くないんですけど。これが必殺技：ギャラクティカマグナムとかが登場し、技名を叫んで殴ると相手が吹き飛んでしまうような表現が出た途端、作品は一気に人気爆発したわけですよ。

あれも、まさに「ギョッ！」とする話ですよ。ただのパンチで、人が死にかねないのは正に驚きの事態ですよ。やはり漫画には少なからずインパクトがいるのです。

どこに「ギョッ！」とする部分を盛り込むのが重要ですよ。

気持ち悪かったり、馬鹿じゃないかと思われてちよどいいんですよ。

では技巧は関係ないのかと言われるとそうじゃなくて、絵が尋常じゃない巧さを持っていたら、それだけで「ギョッ！」とするんでいいんですよ。大友克洋先生の『童夢』なんて、本当に驚きましたね（笑）

【ヒカル】

前回のインタビューをお受けしてくださった方もおっしゃっていたのですが……。

やはり大友先生の絵は凄まじいわけですね。

【樹崎】

あの絵は凄いですよね。『童夢』を読んだときは、「うわっ、すっげえ」って驚きました。大学のときに電車の中で先生の新刊を読んだとき、電車を降りるよりも漫画に集中する方が重要になってしまって、そのまま終点まで行っちゃったんです（笑）
で、折り返して電車で戻ってきちゃいました（笑）

【ヒカル】

これは読むの止めたらアカンわ！……という状態ですね。

【樹崎】

そうそう（笑）「途中で降りられへんわ！」ってね。
それぐらいに衝撃的でした。

【ヒカル】

大友先生と言えば、いつも話に挙がるのは凄まじく緻密な背景ですよね。
アシスタントさんが過労死するレベルの背景ですよね。

【樹崎】

あそこまで書き込んだ背景はとてつもないですよね。大友先生の背景のおかげで漫画の可能性がグッと広がりましたよね。
普通、漫画といえばキャラがいて次に背景があるのが当たり前なんです。でも大友先生は漫画の中がまるで映画のワンシーン（映像の中）みたいなんです。『童夢』でキャラが空を飛ぶシーンなんて、背景が凄すぎてどっちが上か下か平衡感覚が分からないくらいの感覚になりました。

【ヒカル】

それでいて背景が崩れていないですもんね……。素人目に見ていても、現代のデジタルで描いたり、写真をコピーした背景よりも凄みがありますもん。圧倒されます。

【樹崎】

構造をしっかりと理解しての作画だからですね。あれは本当に凄かったですねえ……。

【ヒカル】

そこにいくと、キャラの絵の話になりますと。人物を格好良くしたのは上條淳士先生でしょ

うか？個人的に僕が上條先生を好きなんです（笑）

【樹崎】

上條先生より元祖は江口寿史先生だと思うなあ。
僕らの世代で一番センスの面で影響与えた作家さんだから。

【ヒカル】

江口寿史先生（代表作：『ストップ!! ひばりくん!』）の絵は可愛いですよ。たまたまなく好きです。

【樹崎】

江口先生が頭角を表したのは、『ひばりくん』よりもその後の『ひのまる劇場』あたりと言った方がいいかもしれないなあ。
絵が凄く、おしゃれで……どんどん進化していった。上條先生は江口さんから影響を受けた作家さんだから、江口先生のと看ほどの衝撃はなかったんだけどさらに突き進めたものでしたね。江口先生の絵は毎月、切り抜いて眺めたもんですよ（笑）

【ヒカル】

江口先生の絵は漫画というよりもポップアートに近いものがあるかもしれませんね。

【樹崎】

グラフィックデザインの影響をありますね。
色んなポップアートの痕跡が見える画風ですよ。先生はアートにもかなり通じてる作家さんなので、見てる側からしても「この絵はこういう技術は、こんなところから持ってきてるのか」とアレコレ感心しましたね。

【ヒカル】

それとなく漫画からアートへのオマージュを感じさせる点はまさに
「凄い」の一言ですよ。

【樹崎】

あの時代はポップアートが面白かった時代でしたしね。ヘタウマな画風が流行ったりも面白かった。

【ヒカル】

読み返すと、漫画雑誌にしても昔は表紙がもの凄いセンスのものがありましたよね。ガロだとか少年誌の表紙が目を引きものばかりです。少年誌とは思えない表紙も多かったり、今ではグラビアも多いですけど。

キャラの話になると、漫画として外せないのが「コマ割り」の話になりますが、樹崎先生からするとコマ割りのセンスが凄い漫画って何でしょうか？僕個人としては高橋陽一先生の『キャプテン翼』が今見ても、コマ割りがとんでもなくダイナミックに感じます。

【樹崎】

『キャプテン翼』の画面は凄かったですね。

僕自身も『キャプテン翼』からは大きな影響を受けましたよ。コマ割りも然ることなんですけど、僕が『キャプテン翼』で凄いなと思ったのは効果音のデカさなんです。効果音が見開きで上下左右に突き抜けるんですよ。

【ヒカル】

効果音もコマ割りも見開きで色んなところに飛び散っているのに、視線がちゃんと次のコマへ移動してしまう流れが高橋先生の漫画にはありますよね。

【樹崎】

先生の作品は、キャラのセリフとか文字での説明が多いんですけど……パッとページをめくったときの迫力が随一ですよ。だから言って、当時のジャンプの中で絵柄が特別に迫力を持っているタイプではないんですよ。

『キャプテン翼』などの高橋作品の迫力の凄さはやっぱり書き文字ですよ。実際に生原稿に描くとき、あのレベルの書き文字の効果音って物凄く巨大なんです。印刷前だから、文字のサイズが凄まじくデカいんです。生原稿に向かうと書き文字の効果音がデカすぎてビビるから、多くの方はあんな表現はなかなかできないんですよ。

僕もナカタニも「そういうことをしなくちゃいけない！」と話してたんです。色んな先生のレベルの高い表現をずっと探して、研究していましたね。その時その時代にヒットしてる作品から常にそうした影響を受けてきました。

【ヒカル】

様々な先生から技術を学ぶのも作家にとっては重要なですね。

【樹崎】

ナカタニが高橋先生と確か、担当が一緒だったんじゃないかな。

だから、色々担当から聞かされた中で……表現として凄いと感じたのは……スポーツ系の作

品で雨や雪を降らせることってです。単純な背景描写に見えて、実は奥が深いことなんです。

なぜなら、特殊なシチュエーションになることで弱い主人公が強い敵に勝てる状況が作り出せるわけなんですね。そういう仕組みを新人が作品に入れるのは凄いですよね。

【ヒカル】

そのようにして、先生たちが成長していったのですね。

【樹崎】

同じように、同期の新人の作品にも注目はしていましたね。

【ヒカル】

新人自体には競争意識のようなものは持っていましたか？

俗っぽく言うと「こいつは凄いな」とか「こいつには勝てる！」みたいな。

【樹崎】

そりゃもう、ぶっちゃけ当時は同世代の漫画家志望のほとんどには勝てるんじゃないかと思ってたんですけどね（笑）

色んな人から影響も受けたけど、身近な人間から特に影響を受けましたね。克・亜樹さんの『僕はこうしてキスをした！』っていう16ページぐらいの漫画が雑誌の増刊に載ったことがあるんです。それを見た瞬間、感動しましたよ。「うわあ、やっぱり克さんは凄いなあ」てね（笑）

その漫画の表紙に、先生が自分でつけたキスマークがあるんです（笑）自分の唇に墨をつけて原稿にブチュッとつけるんです（笑）

その作品は原稿にキスしたところが凄いわけではないんですけどね。

【ヒカル】

漫画原稿に自らキスですか!!?

【樹崎】

原稿にキスをしたのは別として、後の『ふたりエッチ』に通じるシチュエーションに関する考察が凄くてね。これはキスを題材にした漫画なんだけど。

「何%のカップルはこういう場所（映画館や体育館裏）でキスをする」みたいなデータが描かれているんだよ。そういうシミュレーション作品は面白いと感じましたね。

そしたら、ずっと後に発表した同じような『ふたりエッチ』が大ヒットしたわけですよ。あの

とき『僕はこうしてキスをした！』に抱いた面白って感想は間違ってたんだと思いましたね。

【ヒカル】

面白いものは時代を超えても読者の心を掴むんですねえ。

【樹崎】

作家さんの多くは色々な能力が飛び抜けてるわけではないんで、特に現代の作家さんは1つの方向性に向かって能力を伸ばすべきだと思うんですよ。

手塚治虫先生や石ノ森章太郎先生の時代は、云わば「どこを踏んでも新雪な時代」だったんです。けれど今の踏み荒らされた時代は1つの分野に秀でていないと受け入れてもらえない。

【ヒカル】

単にそれは職業漫画を描くとか、スポーツ漫画で頂上を目指すわけではなく？

【樹崎】

そういう意味ではないですね。

自分の魂の方向性を打ち出して描くことが大事だと思うんですよ。感覚を研ぎ澄まして、作家性を研ぎ澄まして勝負しないといけないわけです。これは田中ユタカ先生が「作家は一生同じことをずっと描き続けるべきだ。そうでないと読者への裏切りになるから」とおっしゃっていたことから学んだんですが……今はそういう時代だと考えています。

【ヒカル】

大事なのは自分の個性をひたすらに持ち続け、曲げないことですね。

新人の方にもそういうことを要求したいですか？

【樹崎】

色々なことを書かなくていいんです。

小池一夫さんは新雪の時代の人だし、原作者さんだから「自分のことを描いたら駄目だ」だとか言うんですが……でも僕としては作家は自分のことを描かないと駄目だと思うんです。多分、ここ数年で一番漫画家さんと会って対談してるのは僕だと思うんですが……そうして多くの現代の作家と話した上でハッキリ言い切りますが……作家さんは皆、自分のことを描いてるんです。

【ヒカル】

樹崎先生が著書の『10年メシ』でも書いた自分の好きなことを作品に出すことで、作品に説得力が生まれるということですね。

【樹崎】

昔の作品でも人気があるものは作者さんが自分のことを描いてるパターン多いですよ。藤子F不二雄先生の『ドラえもん』は藤子先生のいじめ体験から来ている漫画ですよ。先生はいじめられっ子で、何をやっても駄目な子供だったらしくて。そのとき誰かに助けて欲しかった。それを描きたかったらしいんですね。後は誰が助けにくるのかを描くだけの問題で、誰が問題を解決してくれるのかが問題だった。それが猫型ロボットのドラえもんになったんですよ。正に魂の作品でだからこそ時を越えている。

【ヒカル】

今でこそ、『ドラえもん』は漫画の基本、古典とも言える教科書的な作品ですけど、設定としては斬新ですよ。ありそうでなかった。

【樹崎】

富野由悠季監督（代表作：『機動戦士ガンダム』など）もおっしゃってるんですけど。

「作家は子供の頃の自分を助けに行くんだ」と述べています。まさに藤子先生は子供の頃、自分（=のび太）を助けるべく、ドラえもんを作り出したわけですよ。富野作品も大体、描いていることは同じですよ。大体、父親と母親が酷い奴なんですよ（笑）

【ヒカル】

そこで葛藤する少年が描かれますもんね。

【樹崎】

出てくる奴ら、ろくでなしが多いですよ（笑）

【ヒカル】

昔の漫画作品って、父親や母親がとんでもない奴っていうパターンも多いですよ。今ではそれが物語を作るときの定石になっているとは思いますが。

【樹崎】

勿論、全ての作家さんがそうだとは言いませんけど、今ほど昔は裕福だとか幸せな家庭は少なかったですからね。そういう時代を過ごしてきた作家さんは子供時代に感じた何かを描か

ずにはいられなかったんだろうね。僕もそうでしたからね。

【ヒカル】

最近漫画家さんもメディアに出るようになって、待遇は良くなったとは思いますが…
…昔はまだ絵を本職にするという考えがなかったせいか、扱いは良くはなかったですもんね。
先生も親からは漫画家になることを反対されましたか？

【樹崎】

ずっ〜と無言の嫌がらせはありましたよ（笑）

描く邪魔まではされなかったけどね。向こうもそのうち僕が漫画家を目指すの止めるだろう
と考えてたんでしょうね（笑）

【ヒカル】

けれど、そこを乗り越えれば良い作品ができますもんね。話をまとめますと……樹崎先生と
しては新人さんにはもっと自分のことを描いて欲しいわけですね。

【樹崎】

現代は昔ほど貧窮もしてないだろうし、不幸な生い立ちの子は少ないとは思うんです。親も
子供を大切にはしてるし、親がそうでなくても祖父母がカバーする時代にもなっているはず
ですから。

【ヒカル】

時代も変化してきて作家性の傾向も変わってきたんですね。

【樹崎】

でも、「俺は人とここが違うんだ」っていう変態性は秘めているはずなんです。そこで勝負
しないと！

変態な部分＝人と違う価値観、人と違う逃れられない思いみたいなもの。そこが作家性の美
味しいところですよ。

【ヒカル】

ある種のコンプレックスや葛藤……とも言えるでしょうか？

【樹崎】

コンプレックスと向き合うのは、凄く心や精神を削る作業なので、大変なんですけど。でも

、それが作家ですよ。

【ヒカル】

先生も連載中は魂削って作品を描いたと著書『10年メシ』の中で見たのですが、連載中は色んな苦勞とかありましたか？

【樹崎】

萩原一至先生の『BASTARD!!-暗黒の破壊神-』の元でちょっとだけ1話目と途中何話か助っ人アシスタントしたんですけど……萩原先生の絵へのこだわりで圧倒されて（笑）

これは自分も負けてられないと思って次の連載は気合入れました。萩原先生の1日3時間しか寝ない人で、寝るときも寝すぎたらいけないからって机の下で寝てたんです。苦しくてすぐ起きられるからって。そしたら萩原先生は本当に3時間で起きてくるんです。

【ヒカル】

萩原先生は描き込み量がとんでもないですよ。

【樹崎】

凄いのは描き込みだけじゃないですよ。

ボツになった絵もページ量も凄まじいんです。1話目から原稿が落としそうと担当に聞いたんで、僕はアシスタントに立候補したんです。「俺、手伝いに行きます」って。萩原先生と言えば、当時のジャンプでもトップクラスに絵がうまい新人でしたからね。

僕としては間近で、その実力の程を見たかったんです。僕はそのとき最初の連載が終わった直後で、すぐにアシスタントに行けって言われるような状態ではなかったけど自ら進んでアシスタントに立候補しましたよ。アシスタントしに行ったら、部屋中にボツになった小さなコマの絵などが切り貼りしてありました。

【ヒカル】

萩原先生の話になると、どうしても休載のお話しにもなってしまいうんですが……萩原先生はその強い絵へのこだわりゆえ原稿を落としてしまうこともあるんでしょうか？

【樹崎】

こだわりも凄いんですけど、当時のジャンプは1話目はオールカラーなんですよ。フルカラーではなく、2色カラーなんですけどね。萩原先生は表現のために、1コマ1コマごとの表現のために紙を変えて、それを原稿に切り貼りしてました。

そうしてできた完成原稿は長方形じゃなくて、ガタガタの形で印刷所に出すんです。端っこ

がガタガタでも印刷には出ないのでお構いなしでした。紙くらい切り揃えようよ！とは思いましたがね（笑）でも、そんなところより原稿の絵の質にこだわったんでしょうね。コマ単位で切り貼りしますから、1枚の原稿用紙の中にも薄い部分や厚い部分が出てきたんです。そこまでこだわるのは萩原先生くらいだなと思いましたね。あらゆる表現を使っていたね。

【ヒカル】

それでも、なかなか休載って許されないですよね。

【樹崎】

まあ普通はないことだからね。萩原先生はまつもと泉先生の元でアシスタントしていたので、どれだけギリギリまで行けるかも計算のうちだったといいますか（笑）

先生の元へアシスタントしたとき「本当の締切が、いつなのか知ってますか？」と言われてね（笑）

「本当の締切まで粘ろう」……ということがあったんですよ。あと今では許されないんですけど、どのコマにもマニュアルみたいなものがあったんです。とんでもない大量の資料があって、このコマはこれを元に描いて、別のコマではこの資料を描こうという感じで。萩原先生の凄いところは情報整理なんです。

【ヒカル】

情報整理……と言いますと？

【樹崎】

萩原先生の師匠であるまつもと泉先生も、萩原先生の凄いところはその情報整理能力にあるとおっしゃっていましたね。

色々な資料が必要などきに出せるようにしてあるのはパソコンが家庭にない時代、地味だけど手間がかかる作業で、でも必要なことだったんです。萩原先生は本当にそういうあらゆる努力をしていたと思うんです。今だとどのコマにもマニュアルがあるなんて言うと、怒られますけどね（笑）

時代はそれを求めていたしそうして漫画の技術は急速に伸びたわけです。

僕も構図や話とかを他所の有名な作家さんにパクられたこともあるんですけど。それは前向きに・・・「俺も表現を有名な作家にパクられるようにまでなったか」みたいで嬉しく思っていました（笑）

【ヒカル】

昔は参考資料が少なかったですし、週刊連載でどうしても資料が必要な時なんかはAmazonで頼むこともできないですもんね。それは仕方ないですし。それはそれで良い文化かと思います。

【樹崎】

昔は規制とかが緩くて、互いにこっそり文化や表現を盗み合って成長も出来ていましたから。良い時代・文化ではありましたね。ただ、僕も当時パクって描いた表現については今は恥じてるんですよ。だから、昔の連載作品はあまり外に出したくなあ……。『ハードラック』ぐらいならいいんだけど。ある作品は二度と表には出したくない（笑）やっぱ作家としてね……。残念なんです。

気が向いたら、出すかもしれませんけど。

【ヒカル】

自分の作品というのはキャリアが上がるにつれて、後悔も出てくるのですね。

【樹崎】

自分の憧れの作家さんが開発した話の構図を安易に使っちゃったなあ……。っていう後悔はあります。もう、そういうことはしないに限りますね（笑）当時はありでしたけどね。自分の心根が貧しかったなど。

【ヒカル】

でも、そこにいくとアフターヌーンで不定期連載の『ZOMBIEMEN（以下、ゾンビメン）』は納得した出来になったとネット放送でお聞きしました・

【樹崎】

はい。あの時は誰の影響も受けない、良い環境がありました。原稿料も描く時間もページ数も貰ってましたから……。人気もあつたので、あれを一生できたらとは思いますが、そうは思ったとおりには行かないですね（笑）

Q：樹崎先生の活動のこれから――

【ヒカル】

先生は現在、電子書籍方面でご活動なさっていますが……もう誌面に戻ることはないのでしょうか？先生と同年代の作家さんでも、年齢が40歳を超えた方は月間や季刊誌に活動の場を移してる方が多いですが、樹崎先生はこれから主に電子書籍での活動メインなののでしょうか？

40歳を越えてなお、週刊で連載しているのは小畑先生だとか限られた人くらいだと思いますし。

【樹崎】

今は電子書籍で活動するのが楽しくてね。漫画の可能性としては紙媒体を僕は見限っているんで、あんまり興味はないんですけど……。

それでも、もし週刊の少年誌からオファーがあれば今でも作品を連載すると思う。

【ヒカル】

週刊の少年誌は漫画家さんにとって、やはり特別な場所ですか？

勿論、青年誌も素晴らしい漫画が多いですが、少年誌で子供に夢を与えるというのは格別の創作意欲が湧くのでしょうか？

【樹崎】

少年週刊誌でもう一度、それもベストな状態で描けるなら、それで死んでもいいかなあと思うくらい（笑）

【ヒカル】

過去に先生は一度、少年誌から青年誌にて連載を持ったあとに異例の少年誌への読み切り復活を果たしましたよね。編集部に直談判して、読み切り掲載まで至りましたよね。

【樹崎】

あの時も、そのつもりでした。これでやり遂げられたら死んでもいい！と思ってました（笑）

Q:編集さんたちのお話

【ヒカル】

漫画家さんで直談判しに行くって、なかなか聞かないケースですよ。

【樹崎】

やはり……ジャンプに作品を載せることができるのは特別なんです。僕は「40歳まで生きれたらいいわ〜」っていう人間だったんですね（笑）

事実、40歳まで生きてやり残したことはあまりないんです。けれど唯一あるとすれば、ジャンプで昔できなかったベストのコンディションで作品を描くことです。それだけやり直せばとっと思っいて。

【ヒカル】

その勢いで当時の茨木編集長さんに直談判したのですね。

【樹崎】

僕も直談判したときは、ちょっと文句言ってやるくらいのもりだったんです（笑）茨木さんはナカタニの担当でもあったから面識はありましたから。

【ヒカル】

茨木さんって、色んな漫画にゲストキャラで登場してらっしゃいますよね。明るい面白いおじさまという印象を持っています。漫画家さんが作中でいじっていますので、親しみやすい方なのかなと勝手に思っています。僕はお会いしたことはないのですが。

【樹崎】

そうですね、実際親しみやすい方かなと思います。物凄く切れ者なんですけど、面白いキャラクターな人もありますね。作家さんにいじられることを嫌がらない編集さんですね。古くは徳弘正也先生の『シェイプアップ乱』の頃からいじられていますから（笑）

【ヒカル】

担当さんって、人にいじられるの嫌がるのかと思っていました。

【樹崎】

まあそこは人によるでしょうね。茨木さんは進んでいじられてくれる人ですから。

【ヒカル】

昔から作家さんが編集さんをいじる・登場させる文化はありますよね。

『Dr.スランプ』のマシリトというキャラクターは当時、編集だった鳥嶋さんがモデルなのは一般的にも広く知られていることですし。

【樹崎】

いやあ、鳥嶋さんをいじるのは怖いですよ（笑）

鳥嶋さんは怖いなあ、僕は可愛がられてて飯とか連れて行ってもらいました。でも気に入ってない作家さんには容赦ないですから。鳥嶋さんの伝説といえば、ジャンプにコネで持ち込みに来た子が昔いたらしくて、そしたら鳥嶋さん原稿を読んで「おい、こいつさあ……コネで持ち込みに来たんだけど誰か見てやってくれねえ!!？」って持ち込みに来た子の目の前で原稿ほっぽったという嘘か誠か分からない伝説があります（笑）

【ヒカル】

あの人だけは怒らせてはいけないという噂話も聞いてます（笑）

勿論、鳥嶋さんもお会いしたことないので深くは知らないんですけども

【樹崎】

鳥嶋さんは目が殺し屋みたいな鋭い目をしてるんです（笑）

でも作品に対する真摯な姿勢がとても好きでした。

【ヒカル】

当時に比べたら、編集さんの人柄も変化したのではないのでしょうか？

（昔の編集さんは硬派な印象があります。漫画とかの影響が強いですが）

【樹崎】

んー、どうでしょうか……。

まあ当時も僕からしたらまだ茨木さんも鳥嶋さんも1人の編集さんで、ここまで凄い名編集になるとは思っていなかったですし……。今の編集さんも後に凄く有名な編集になる方もいるのでしよう。

ジャンプにいたころ、鳥嶋さんから「作家は処女作に向かって成熟する」という言葉を頂いたんです。今考えると、その言葉はさっき話したこと「作家は1つのことを書き続けるべき」って言葉と通じてますよね。

【ヒカル】

なるほど納得です。

【樹崎】

だから僕は『ゾンビメン』で描いて納得したことは『ff』を書き上げたときと同じなんです。僕のツボはそこしかないなあと思います。

【ヒカル】

いやあ、でも分かっててもできないことですよ。

【樹崎】

そうなんです。

だから過去の作品の一部には悔いがあるんです。物語を描くうちに自分の描きたいものに近づきはするんですけど、最初の出だしで人のモノを借りてしまったんです。それをずっと後悔していたんです。

【ヒカル】

これは俺の作品であって、そうでない。そういう心残りですね。

【樹崎】

まあ持ち味がなくて、特に迷うこともない人はバレないようにパクってもいいんじゃない？とは思いますが（笑）僕はしませんが。

【ヒカル】

うまいこと、色んな作品の良さをミックスしちゃう人もいますよね。

【樹崎】

まあ上手に混ぜて自分の魂の部分を裏切っていなければ、それはそれでいいと思います。売れるために描くのだってありだとは思いますが。別に尊敬はしないですけどね（笑）

【ヒカル】

先生はそういう考えには若いときでも至らなかったですか？

とりあえず唐突にトーナメントや商業的なお色気要素だしたり、唐突に新展開に持ち込んだりして安易に人気を取ろうということはなかったでしょうか？

一般読者視点から見るとシリアスな暗い重厚な話で序盤苦戦するよりも、明るい展開や美少女で人気を取るほうが難易度的には下がるように思えるんです。読者的にも食いつきやすいですし。

【樹崎】

人気は取りたいんですけどね。

僕は描きたいものが先にあって、漫画家になったので、そこは裏切れないんです。でも人気を取るの大切なんで、だから僕は技術本を売るほど技術にうるさいんです。

自分の描きたいことを伝えるために、僕は描きたいものがある分勉強するんで……僕はその分、損なんですよね。描きたいことがあるってことは売るという面では損なんです。描きたいものがない方が好き勝手に流行のものを描けるんで。

【ヒカル】

確かに実際はコツコツ練習して成長する駄目駄目な主人公の成長物語を描きたくても、それは連載になると辛いですもんね。

最初からある程度、主人公に実力が伴っていると描きやすいでしょうし。でも、それだと駄目駄目な主人公が描けないジレンマがありますもんね。

【樹崎】

なので僕は「あっ、この手法なら売れるな」と確信しても自分の求めるものと違えばやらないんです。

「うん。まあこれは分かったからええわ」って感じで描かないんですよね（笑）

【ヒカル】

なるほど。けれど今も昔もやはり、主人公がコツコツ成長する漫画には難しさがありますよね。

Q：スポーツ・努力マンガの難しさ

【ヒカル】

今も昔もコツコツ成長する主人公の漫画って難しいという話なんですけど……『キン肉マン』も主人公キン肉マンが弱い序盤は連載苦労したと聞きますし、やはり壁がありますよね。

【樹崎】

スポーツや努力物がある程度、雑誌が余裕を見てくれないと人気が取れるのが遅いですからね。……ちばあきお先生の作品が代表じゃないかな。修行や努力してる間は人気出ないですから。大体、10週目くらいから人気は出るんですよ。『山下たろーくん』とかはそういう漫画の代表格だと思います。

【ヒカル】

ちばあきお先生の『キャプテン』のように非常にゆったり主人公が成長していくタイプの漫画は10話や20話でようやく小さな成果が出ますよね。今じゃ、そういう漫画は減りましたけど。

【樹崎】

そういう小さな流れが本来大事なんですけど、雑誌はなかなかそれを許してくれないんですよ。それは厳しいなと思うんですけどね。スポーツものだと、スポーツの説明だけでもページを食いますし……それでいてページ数の少ない読み切りで人気を取るのとは不可能なんですよね。

僕も最後に載せた読み切りではその壁に突き当たってましたね。MTBを題材にした漫画を描きたかったんですけど……そのスポーツの説明だけで、ページがかかってしまう。まず成功するための公式としてはまずキャラクターの魅力があって、じゃあこの主人公が好きなスポーツは何だ？……っていう順番でないと人気が取れないんですね。でも、それを短いページ数でそれを全部表現するのは無理なんですよね（笑）

【ヒカル】

読み切りのスポーツの説明に2~3ページ使うだけでも、だいぶ窮屈な感じになりますよね。

【樹崎】

僕はジャンプでの読み切り時（8年くらい前）は50ページほどもらいましたが、それでも無

理でしたね（笑）

自転車でガーッと走るワンシーンを描くだけで10ページは消費しちゃいます。普通にバトルを描くなら、単行本1冊分の情報量が必要になりますから。

井上雄彦先生の『SLAMDUNK（スラムダンク）』とかを読むと理解できると思うんですが、緊張感が増すと時間が止まったように感じるんです。読んでいても、そんな風を感じないと駄目なんです。すると、必然的にコマ割りがある程度大きくなって、スローモーションのように見せるほど熱さが伝わるんです。それを簡略化すると、熱さが伝わらないのがスポーツマンガなんです。だから短いページで熱さを伝えるのは物凄く難しいんです。それに加えて、キャラクターをしっかり描くのはさらに難しいんです。

【ヒカル】

ファンタジーと違って、現実のスポーツをモデルにしてる場合は余計に難しいですよ。突飛なことをするにしても難易度が高いですね。

【樹崎】

そういう意味じゃバトルやファンタジーの方が読み切りは描きやすいかもしれませんね。皆、そっちのジャンルに流れちゃう気持ちも分かります。

まあ当然、ファンタジーにはファンタジーの全く違う難しさがあるんですけどね。

スポーツは何かと制約が多い。なので、そこは出版社側にもっとスポーツものに関しては余裕を見てあげて欲しい。スポーツものはページ枠が別という設定があるんじゃないかな？

【ヒカル】

描写1つにしてもスポーツは（例えば、野球では）ピッチャーがボールを握って投げるまでに描くものが多すぎますもんね。

【樹崎】

投げて→打つでは終わらないですからね。

投げるところから野球ボールの握りから汗、空を切るボールの軌道、風向き……色んな緊張感を見せていかないといけない。どんな音でボールがミットに収まって、キャッチャーはどのような風に揺れるのか、審判はどんな風に驚くのか。そんなことを全部描かないと面白くないですよ。

【ヒカル】

読者を納得させるだけの描写が重要なのです。簡略化すると読者が納得してくれない。

【樹崎】

当たり前でない部分を描かないとスポーツものとしては新しくないので。

【ヒカル】

そこで内容を弾けすぎても読者が置いてけぼりになる可能性もありますね。

新連載見ても、スポーツものが10話くらいで終わると……ああ、またこんな感じで終わるのかとは感じます（どれもこれから盛り上がりそうなところで終わる）。

【樹崎】

スポーツ漫画は30話分ぐらいネームを用意しておいてもいいとは思うんですけどね。

【ヒカル】

10話くらいで打ち切られる漫画を見ると、これから出てくるライバルとかが本当に描きたかったんだろうなと作者の無念を感じます。

【樹崎】

マガジン系列はスポーツものに関して、ゆったりめに見てくれるので描きやすい環境とは思っています。

昔のジャンプはスポーツもファンタジーも同じ土俵ですからね。今はどうかは分かりませんが、スポーツものはある程度、寛容に見るっていうことはあるとは思うんですけどね。友人の先生が描いた人気スポーツ漫画も当初は人気なかったらしいんですけど、それはスポーツものだからということで誌面のアンケートでは人気がなくとも連載は続いたんです（その後、その作品はテレビで大ヒットしました）。なので、ジャンプとかでも誌面での人気は全てではないですね。

他の作品でも誌面アンケートでは人気なかったけど、別枠というか連載が続いていた作品もある。単純な人気ではなくて単行本の売上が良ければ連載が続くということはあるからね。

Q：打ち切りを経験して。

【ヒカル】

これは聞いていいのか、分からないのですが……聞いちゃいます！
先生は自身の漫画が打ち切られると分かったときはどのような心境でしたか？

【樹崎】

うーん。僕は担当さんが「打ち切りだなあ」って諦めモードに入ってるのに、ムカついてしまいましたね（笑）

作品が終わることは決まったけど僕は諦める気がなくて、最終回まで逆転があるだろうと思っていました。簡単に諦めんなよ！……とは思っていました。

【ヒカル】

樹崎先生の著書『10年メシ』の中で読んだのですが、全11話の中で7話目ぐらいに打ち切りが決まったんですね。そこから、さらに気合出して漫画を描いたら人気が上がっていったんですね？

【樹崎】

はい、人気は上がりましたし僕も諦める気がなくて……全11回の11回目（最終回）を描いたら、担当さんが締切を1日早くしてきてね。その理由が自分の休暇のために締切を早めたことが後々、明らかになってね（笑）

それ知ったときは僕は凄く怒ってね（笑）最終回のために凄く頑張ってたので余計に。なので『ハードラック』の最終回付近はかなり描き込んでいます。まあその他の部分で、その担当さんは凄く頑張ってくれたので特に遺恨はないですが（笑）。

編集さんと漫画家では頑張るベクトルもフィールドも違うんですね。でも当時はそう思えなくてね（笑）

【ヒカル】

先生的には「ああ、駄目か」と落ち込むのではなく、そこから自分を追い込んで作品を描いていったんですね。

【樹崎】

人より多少ハートが強いからか、逆境に強いタイプなのか（笑）そういう状況に燃えるんで

。むしろ僕は人気があると分かってるたら、「今度は違う事やってみよう」とか、ろくなことを考えないんで（笑）

【ヒカル】

連載が長くなる（上手くいく）と、気持ちが逸れたりもしますか？

【樹崎】

上手くいくと、気持ちが逸れることもあるかもですね。まあ人によると思う。僕はそういうところが駄目な人間なので（笑）

マガジンで連載ネームしてるとき、僕が担当さんに言われたことで「樹崎くんは攻めのシーンは上手いけど、守りのシーンは凄い苦手だよ」ってのがあったんです（笑）

自分でもそのとおりだと思いました。攻めのシーン、主人公が怒りに燃えたり、アクションしたり、感情が爆発する格好良いシーンは確かに自分でも気合が入って上手く描けてると思うんです。そうじゃない逆のシーン、主人公がウジウジしたり、鬱々している守りのシーンは結構おぎなりに描いていたんです。

【ヒカル】

言われて、改めて問題に直面したわけですね。

【樹崎】

それは言われるまで気がつかなくて、「だって守りのシーンはそういうもんじゃないの？」とか思っていたんです。でも作家として、技術としてそれでは駄目だと思い、それをそのままというわけにはいかないんで考えて……それ以後は、そういうシーンも攻めにいくことにしたんです。

担当さんから「そういうキャラがウジウジしている場面ですら、読者にそういうシーンをもっと読みたいと思わせることができるはずだ」って言われてね。それに納得して、今ではどんなシーンを描く際にもそれを描くのに最大限の必要な情報を盛り込むことを自分のテーマにしていますね。前向きでないシーンすら前向きに描くという……。

【ヒカル】

先生も段階を踏んで、編集さんからの助言も得て、成長していったのですね……。

【樹崎】

こういうことを若い頃から理解できていたら苦労はないんだけどねえ（笑）

【ヒカル】

でも若いときは若いときで、自分の力を過信しすぎてしまうこともありますし難しいですよね。

【樹崎】

昔は技術はなかったけど、今は技術があるから若い子に教えるの楽しいんで。個人的には教えるのに向いてる性格だなあとは思いますが。講師するのも楽しいので。

【ヒカル】

けれど、90年代に連載を持った作家さんで打ち切りを経験した多くの方は、もうどこで何をしてるか分からない人も多いですよ。個人的にもうあの人の作品は読めないのかと思うと、淋しいです。

【樹崎】

悲惨なことになっている人も多いとも聞くけど。当時は横の繋がりがなかった時代だから、行方をくらますとその後、どうなっているかなんて分からないんだよね。ジャンプの人は沢山生き残ってると思うんですけど。

【ヒカル】

読者からすると、たまに生存報告と言いますか。漫画の道を止めても、軽い絵だけでも見せてくれると嬉しいんです……。

【樹崎】

どうなってるか分からないですよ。

【ヒカル】

『奇面組』の新沢先生も長い間、姿が見えなかったんですが、Jコミで作品が公開されているのを見ると、「ああどこかでお元気なんだな」って安心しました（笑）

【樹崎】

新沢先生は腰、ヘルニアかな、何かをやっちゃって、漫画が描けなくなっただけで……。

佐藤正先生（代表作：『燃える!お兄さん』も全然聞かないですね。

【ヒカル】

Jコミで一応、作品公開はされていましたがけど……ジャンプからいなくなった後は作家活動聞かないですね。Jコミで作品を公開しているということは、赤松先生と何らかの形で連絡取っているのかなあとは思いますが。そこは僕には分からないところなので。今でこそ、ジャンプ作家さんが他誌で連載を持つことも増えましたが、90年代はそういうのは少なかったですよ。ジャンプでヒット作を出しても、他所で連載持つ人は昔は少なかったといいますか。

【樹崎】

佐藤先生が描かなくなった時代だと、横の繋がりもなかったし……当時の人からしたらジャンプで描いていた人が他所で描くのは落ちぶれ感(?)に近いものを感じていたのかもしれないですね。勿論、今はそんなことはないですよ。

モチベーションの問題でジャンプで描いていた人が、他所で漫画を描くというのはやはり難しいとは思いますが。僕もジャンプでもう一度描きたいと思ったのは、ジャンプで描くことほどに他誌の連載は燃え上がらないんです。けれど、後にアフターヌーンで連載を持てたのは素直に嬉しかった。アフターヌーンはジャンプとは対極にある漫画雑誌なのである意味頂点だったし……アフターヌーンと両方に連載したジャンプ作家は、僕と星野之宣先生ぐらいだけだ(他にもいたかもしれないですが)……っていう喜びがね。

【ヒカル】

ジャンプとはまるで毛色が違う雑誌ですよ。

【樹崎】

ジャンプが売れる面白い漫画だとすれば、アフターヌーンは売れるとか関係なく面白い漫画を載せていた。今は路線変更があつてどうかは分かりませんがね。

僕が載ったときは、そういう雑誌だったので、そんなところで描かせてもらえるようになったときは凄く嬉しかったですね。燃えて描いていました。

【ヒカル】

そういったところで描けるのは作家として成長というか、実力が認められたみたいな評価の表れでもありますよ。

【樹崎】

そうですね。でも『ゾンビメン』が人気あつたとも聞いていたけど、まあ色々あつて……なかなかうまくはいかないもんです。

必ずまた続き描きますけどね。

Q: デジタル作品・作画について

【ヒカル】

先生はデジタル作画についてはどのようにお考えですか？中にはデジタルに関して否定的な方も多いですが（やっぱりアナログが1番と言い切る方もいます）、先生の意見を聞いてみたいです。

【樹崎】

まあ言っちゃうと、新しい絵の具ですよ。まだデジタルという絵の具の使い方をマスターできてない人が多いだけで、何の疑問もなく使うべきだし……、もっと絵の具の使い方を工夫しようよというわけです。

【ヒカル】

先生的には使いこなせたら問題はない。そんな感じでしょうか？
線の具合とかはアナログ固有のものがあるとは思いますが……。

【樹崎】

いや、デジタルでも手書きとほぼ同じことはできますよ。ただ、デジタル一式を揃える初期費もかかりますから新人さんにとって大変だとは思いますがね。昔は紙とペンがあれば、一攫千金の雰囲気がありましたけどね。

【ヒカル】

先生的にはデジタル推奨ということでしょうか？

【樹崎】

工夫さえすれば、デジタルの方が優れた絵の具だと思いますので、紙にこだわるのは……紙に慣れている、もしくは時間がなくてデジタルにできない人以外はデジタルでもいいと思いますよ。使わないのはもったいないので。

【ヒカル】

なるほど。

【樹崎】

アナログの良い価値としては原稿が手元に残るって点なんですけど、正直キャリアが長いベテランの家では原稿は邪魔になりますからね。昔はデータで原稿管理できなかったですけど、今はデジタルでの整理は楽ですから。

僕も正直、原稿が邪魔なので売っぱらいたいんですよ（笑）

【ヒカル】

場所をとるし保存状態も考えないといけないし、没原稿でさえ溜まっていきますもんね…
…。

【樹崎】

それを自分の子孫に渡されても迷惑なだけでしょ？（笑）多くのベテランは今そう考えているわけです。

昔の僕は手塚治虫先生や、ちばてつや先生と自分が並ぶと思っていたから原稿を自分の魂と思っていたけど……そんな日は来ないので（笑）

つまり先生としては電子書籍などのデジタル方面をどんどん推奨しているわけですね。

【樹崎】

電子書籍は世界進出のために必要だし……世界に出ないと、もう日本の漫画は落ちぶれる一方なので。

電子ならではの漫画の見せ方があって、さらに漫画は進化できると思うんです。進化しないと漫画は子供も読まなくなってきたり、少子化もありますし……読まれないということは漫画という分野が他の文化に負けてきているというわけだから電子で新しいことをしないと。紙で描いて、紙で読むのが漫画だと思っていたら過去の文化として落ちぶれてしまう。

【ヒカル】

そこで先生たちはDomi xなどで新しいデジタルの方向性を探っているのですね。

【樹崎】

Domi xっていうのは可能性全肯定の何でもありの電子書籍で、表現を限定した言い方ではないですよ。今は映像にこだわってますけど、アプリとして売れるならアプリでも問題ないです。本当はデジタル作品にも紙のように、ページをめくる感覚を入れたいです。そこに音楽もあり、エフェクトもあり、アニメもありを盛り込めば、もっと面白くなるはずですよ。まあいつの日か必然的にそうなると思いますので。

【ヒカル】

世界中で電子書籍の流れ自体はできてきていますもんね。
あとは成長するのを待つといいですか。

【樹崎】

あとはいつできるか。その方向性がどうなっていくのかが問われるだけですね。縦スクロールでの作品公開の方がデータは少ないので、縦スクロールでの作品公開になるかなとも思うんですが……、横にページをめくる開き効果感覚も面白いし、このあたりは長い時間をかけて分かっていく感じですね。

【ヒカル】

まだまだ模索段階なんですね。電子書籍が本格化し始めたのも、ここ2~3年ですもんね。電子コミックスを読んだことはあるんですが、作品ごとに縦スクロールだったり横スクロールだったりバラバラですよ。かつ倍率などで見えにくいコマもあったり、標準の設定を定めにくいところは確かにありますよね。

Domi xなどもまだまだ苦労している点はありますか？

【樹崎】

まあ苦労はしてますけど、楽しいという感情が先にあるので苦ではないですね。紙に漫画描くより楽しいね。手塚治虫先生や石ノ森章太郎先生が寝ずに漫画を描いた気持ちが、近年分かったんです。新雪を踏む楽しさが、あまりに楽しいんです。
新しいジャンルに挑戦するクリエイティブさが楽しくてね、寝る時間も惜しいんです。いい年してこんな無茶してたら早死しちゃうなとも思うけど（笑）

【ヒカル】

先生は近頃はどれくらい1日で活動してらっしゃるんですか？

【樹崎】

まあ電子関連とかの仕事がないときは普通に7時間くらい寝たりもしますが、電子関連などで仕事してる時は3時間くらいの睡眠ですね。
もうすぐ半世紀くらい生きてるのに、そんなことをしてたら早死しちゃうなとも思うんですけど……まあ体に問題はないので（笑）

【ヒカル】

楽しい仕事のときは時間は一瞬で過ぎちゃいますもんね。

【樹崎】

ホントにそれなんだよね（笑）

深夜に「ああ、もう1日終わりだ。寝るの勿体無い」って渋々寝ます。そんで翌朝、「あっ、やらなきゃ」ってすぐに作業に向かいますね。新しい表現に挑むのは楽しいので。

Q：声優さんと漫画の可能性

【ヒカル】

Domi xなどでは漫画に声を当てたりもしていますが、声優さんを起用することについては苦労はありましたか？

【樹崎】

最初は僕も声に関しては知識がないから、専門学校の声優さんのたまごさんに声を付けてもらってるんだけど、声の良し悪しが分からなかった。勉強中の学生さんだから、云わばまだまだ素人なんですけど……その中でも優秀な子の声を生で聞くと「おっ、いいんじゃない？」と思ってしまうわけなんです。加えて、あんまり良く思えない演技でも「この子はこの子なりに考えて演技したのかもしれない」と思って、口出ししにくかったんですね（笑）

そのうち、こちら回数を重ねると「ああ、こいつら考えて演技してないな……」というのが理解できるようになりましたけどね。

【ヒカル】

見分けがつくようになってきたんですね。

【樹崎】

二十歳前後の子供ですから・・・そんなに深くは考えてないので、こちらから演出は教えてあげないと駄目ですね。

作品に声を当てるなら、その作品の作者さんと呼んで……こっちからドンドン作品に秘められた深い部分を話してあげるようにしています。作者さんの心の根っこの部分を声優さんに話してもらって、声優さんに演技してもらおうようにしているんです。その上で1人1人のキャラや作品が言わんとしていることを理解してもらうのが大事ですよ。

役者さんは自分の役に入り込めばオッケーとかんがえていて……でも、役者さんが役に入って演じるのは僕は当然のことだと考えていて、その先にある演出で何が求められていて、どんな演技を必要とされているかまで……こちらとしては求めたいわけです。

そこの部分を作者さんや僕から直接語って解決しようとしています。Domi xの中での演技はアマチュアも多いので、プロの声優さんには勝てない部分も多いんですけど、他のアテレコ作品よりはそういう意味で魂込めてやっているんで……その魂の部分では勝ってるんじゃないかなと思ってます。事務所に受かってプロになる子も次々出てますしね。

【ヒカル】

個人製作のアテレコ作品はネット上にもありますが、Domixが行っているような長い尺（15分以上）の作品はそうそう見かけないですね。

どんどん成長していく分野だと思います。何より、声を当てるということは違う言語での作品制作が可能になりますもんね。

【樹崎】

あとは本丸の世界戦略ですね。

韓国版の製作は決まっているので、達成できると思います。他の国だと文字を変えたり、色々な問題がありますね。これからどうやって解消するか……悩ましいところなんです。

基本、海外では文字を読む方向も違って、漫画の文法変更を余儀なくされるので悩ましい問題ではあるんですよ。映画のように漫画に字幕をつける案もあって、そういう案を出してくれる企業とかに限って原稿料、使用料とかが高いんですよ（笑）もう悪魔の囁きですよ（笑）

それでは漫画として面白さがなくなるのでお断りしたんですけど、でもそこで高い使用量を得たら活動は楽になるし、資金源も増えるし……（笑）

まあ継続して技術的なことも含めた話し合いで妥協案を模索中です。

【ヒカル】

そういった葛藤があるんですね。使用料が高ければ、それだけ運営は楽にはなりませんもんね。

【樹崎】

けれど目先の利益には飛びつかないようにしています。負けないように（笑）

【ヒカル】

本質の面白さを求めて、（電子上での）漫画を進化させていくわけですね。翻訳だとか言葉の問題は難しいですよ。

【樹崎】

ソフトも充実してきてます。音声についても、もっと進化できると思っています。アニメとかは制作スタイルが決まってしまっていて常識に捕らわれていると思うので……もっと常識を壊して作品作りを作ろうとは思いますが、もっと少人数で低予算でも良いものができると思うので。それによって、どの漫画にも声を当てることができれば、声優さんの仕事が増

えますからね。

【ヒカル】

1つのジャンルが盛り上がると、連鎖して違う職業の方のお仕事も増えますよね。

【樹崎】

今、声優さんのお仕事少ないんですよ。上の人がどかないから、新しい声優さんに仕事が回らないんですよ。なにに志望者は山のようにいる・・・そんな状態なんです。そこを打破したい。

才能ある子を引っ張りだしたい！

【ヒカル】

僕もそこは何とかしたいと思っています。僕の友人でも声優志望がいるんですけど、何せ仕事がないらしくて……そこが個人的に歯がゆいんです。

【樹崎】

声優さんと漫画家さんはもっと近い関係になれると思います。漫画空間で、いくつか番組をしているのは漫画家と声優を近づけるという目的もあるんですよ。漫画空間の宣伝もありますけどね。

【ヒカル】

漫画空間でも色々な試行錯誤を？

この前、19歳の女の子が番組してるのをチラッとみました。

【樹崎】

してますよ～。19歳の子は、17歳のときに主演してるんで演技力はあるんですが……それとMCの才能があるかどうかは別なんですよ（笑）今後の修行に期待してますが。

【ヒカル】

鈴木さんや守屋さんは慣れてますよね。

【樹崎】

鈴木さんはキャリアもありますし、もう脚本家としても1流なので、安心して見てますね。その1流の演出術を漫画について語るときも番組内でもっと語ってもらってもいいんだけど……そこはこちら（漫画家）へのリスペクトの関係でなかなか言えないのかなあとは思

ます。

【ヒカル】

鈴木さんや守屋さんは場馴れしていて、MCもこなせますけど。なかなか全ての人がそううまくMCはできないですね。

【樹崎】

他の子は声は出せてもMCが苦手だったり……まあそれも才能ですね、MCをこなすのも。面白いことを言わなきゃいけないし、わかりやすいキャラもいる。単に上手に喋るだけではないですね。

【ヒカル】

そこを伸ばさないと難しいですね。

先生としてはネット関係で、漫画業界を盛り上げていこうっていうのが当面の目標ですか？

【樹崎】

そうですね。ネットラジオも姉つくすもDomi xの宣伝媒体に近いので、基本は電子書籍中心での活動ですね。そこにできる限り、力を入れたいですね。ネットラジオは特に人とのつながりが広がるので楽しいです。

【ヒカル】

樋口大輔先生（代表作：『ホイッスル！』）の回や、新條まゆ先生の回などは見ていたのですが面白かったですし、めっちゃ盛り上がっていましたよね。

【樹崎】

うん。人の集まり方が凄かったね。もうちょっと深いところまで作者さんと会話をしたいけど、顔出しで生放送だし……なかなか簡単にはできないよね。姉つくすとかの前に（カメラが回ってないところで）、お話しした内容の方がずっと濃ゆかったりします。

【ヒカル】

作家さんの担当さんとの兼ね合いがありますもんね……。けっこう凄い作家さんが出演してますよね。にわのまこと先生はリアルタイムで見たことがあるので、感動しました。

【樹崎】

ジャンプ作家はそうそう人前には出なかったですからね。

Q:規制条例についての議論

【ヒカル】

樹崎先生と言えば、僕が思い当たるのは先生が自身のホームページ上でも公開している「規制条例への反対声明」ですね。規制条例に関してはここから先はどのようになると思いますか？既にコンビニから徐々に18禁の本は消えていってますよね。

【樹崎】

規制があった方が作家は燃えると思うんです。なので実のところ、そこまで規制には反対派ではないんです。ただ僕は単に規制を仕掛けようとしている人たちの心根が嫌いでね（笑）

【ヒカル】

「文学なら（エロも）大丈夫」という猪瀬元知事の発言などが該当するのでしょうか？今、猪瀬さん大変なことになってますけど……。

【樹崎】

そこが特にということはないですが、ああいうところは本当にムカつきますね（笑）
「ざまあみろ」と思ってます（笑）

【ヒカル】

猪瀬さんに関しては実際悪いことをしましたからね……。
あんだけ色々言うてたのに、自分がそういうことをしてると……まあそういう評価になりますよね。

【樹崎】

そういう人ですよ。行動に表れたというか。
うーん。政治をする人も最初の頃は正しい志であったはずだろうに……こうなってしまうんだね。多くの人々の支持を得るには、多くの人々が言ってる方に合わせる方が楽ですからね。石原慎太郎さんもそうだった。

【ヒカル】

マイノリティー側の意見保護が大事かもしれませんね。マイノリティーな立場を否定すると

いうことは、政治家が声明を上げて述べるところの「差別撤廃」とは相反しますもんね。

【樹崎】

石原慎太郎さんなんて差別ばかりでしたよ……、けれど石原さんを慕う高齢層にはそれが受けますから。お年寄りも困ったものです（笑）

若者が選挙に行けばこれも解決すると思うんですが、若者は選挙に行かないですもん。…
…とか言いつつ、僕らが若い時も若者は選挙にさほど参加してなかったから全然責められない（笑）

【ヒカル】

僕は多少、規制はあっても良いかなという意見なんです。エロはあっても良いんですけど、
小学1年生にエロ本見せつけるのは気が引けますし（笑）

日本の学生は理解があるので、中学生になればエロに関しても自己責任で何とかかなると思う
んですよね。

【樹崎】

僕は小学生の頃から、『デビルマン』読んでましたけどね（笑）

敵や子供の首がスパーーンって飛んだり過激な表現はありましたし、セリフも過激な作品
でしたね。「人間こそ悪魔だ」ってセリフやテーマがね（笑）

【ヒカル】

今だったり完全に規制が入りますよね。でも、『デビルマン』を読んで犯罪を犯した人も聞
かないので規制することはないと思うんですけどね。

【樹崎】

僕はそういう作品を小学生時代に読めて良かったと思ってますよ。人間の本質について考
えることができました。そういうものを読まないで生きている方が僕としては恐いですね。

常識を疑わない人間は簡単に操作されますからね。

規制する側はそうしたイエスマンを増やしたいわけですね。

【ヒカル】

過激な作品を読むことでしか得られない知識もありますもんね。そこは教科書みたいな作品
には真似できない個性ですから。

僕も高校生ぐらいのときにジョージ秋山先生の『銭ゲバ』が復刻したので読んだんです。あ
の作品には考えさせられるところが沢山ありました。でも連載してからずっと規制されてい

た漫画なので、この漫画が規制されていたのは勿体無いと感じましたね。

【樹崎】

僕はほとんど規制はすることはないと思います。

子育て経験ある人にはいくら分かる話をしますね。子供の好き嫌いをなくすには食卓に色々なメニューを出さなきゃいけないんですね。食べなくてもあきらめずに食卓に並べる……そうすると個人差があれど、いつの間にか色々なモノを食べるようになるんです。子供のうちは自分に必要なものを見分ける能力があるんです。子供は自分の体に必要なものを美味しいと感じるので、自分で選別して食べていくんです。それを続けていくと好き嫌いはなくなるはずなんです。

【ヒカル】

なるほど。

【樹崎】

そこで「何で食べないんや！」と無理やり押し込むと駄目です。僕はされましたけど（笑）すると、一生の好き嫌いが起こるんです。そういうことが規制をすることによって起こると思うんです。子供は自分に必要なものを選別する能力を持っているんで……。子供にはそれだけの力があります。「これはエロいから、暴力的だから」と規制をすることには凄く危険なことだと思います。

【ヒカル】

少なくとも……文学だからセーフ、漫画だからアウトになるのはおかしい話ですよ。

【樹崎】

めちゃくちゃおかしい理論ですよ（笑）
太宰治さん読んで誰が得するんですか。

【ヒカル】

昔の小説ではえげつない表現がありなのに、漫画で人の腕が吹き飛ぶ表現がアウトになるなんて説明になってないですよ。

【樹崎】

そうすると、三島由紀夫さんだって「大事なモノは火をつけて燃やしてしまえ」とか言うてるんですよ（笑）

大江健三郎さんは、死体を沈めるバイトの話を描いているけど、実際はそんなことないんだよね。だから現実を知って、その小説を読むと「おい！そんな死体を沈めるバイト実際何かないじゃないか。大嘘つきめ！」とは思いますが、小説もそういう実際はそんなことないことを描くから面白いんですよ（笑）

【ヒカル】

漫画だって同じですよ。人の手からは普通、かめはめ波は出ないし……人の手刀で腕は吹き飛んだりしない。でも、そこが面白い。

【樹崎】

ねえ……腕が吹き飛ぶ描写なんて金閣寺に火をつける描写よりマシじゃないですか（笑）。太宰治なんて女と自殺しようとして、女だけ死ぬような話を書いているだけじゃなくて実際やってるんですよ。

「そんな話がありで、漫画で殴り合いで腕が吹き飛ぶという、どう見ても架空の話がアウトなの？」って思いますよ。まあそもそも違うジャンルですから、比較するのもおかしな話ですけどね。詰まるところ、何でもありでいいと思うんです。

ダメって言われたら、それで作家は燃えるのでそれもいいとは思いますがね。

【ヒカル】

ここから先は規制は激しくなるでしょうし、作家さんの工夫が試されますね。

【樹崎】

その工夫が楽しいですよ。工夫さえ封じる世の中じゃ終わりですけど、僕もジャンプ連載中も規制の壁に突き当たったことがあったんです。

「これは表現のしようがないなあ」と思いました。

悪者が市民を陥れる言葉で「たかが●●のくせに」という言葉の「たかが」がアウトだったんです。これを言われると、表現のしようがないんです。「百姓」って言葉を作品に使おうとしても差別表現として「農民」という言葉に変更されたり、昔の人は農民なんて言葉使わないですからね。

【ヒカル】

時代背景的に「百姓」という言葉を使わないと、違和感を感じるとは思いますが……話が飛躍すると教科書の「百姓一揆」という単語はオツケーなのか。「時代劇はどうなんだ」という話にまで飛び火しますよね。

違う表現を使うと言葉のニュアンスが変わったり幼稚な発言になってしまいます。意図しな

いところで作品の質が下がってしまう。そこを含めて漫画業界で考えて行く問題かもしれませんが……。

漫画業界は貸本時代から見るともう少し長い歴史ですけど、今の形になったのは戦後から現在まで。大体70年くらいですから、まだまだ100年経っていない、まだまだ動いていきま
すね？

【樹崎】

もう20年もすれば漫画をずっと読んでいた世代が中心になりますから、表現に関しても多少は変化すると思います。実際に時間が経たないと何とも言えないですけどね。何かしらの宗教に負けることもあるでしょうし（笑）

【ヒカル】

漫画家さんで表立って意見を公表できる人材があまり多くないですよ。そもそも漫画家さんは忙し過ぎて、政治まで干渉できないですから。

【樹崎】

そうですね……。政治まで参加してるのは赤松先生くらいなもんですよ。

【ヒカル】

スポーツから政治家になる人がいるくらいですし、漫画家からも政治家が出る時代が来ても良いかと。

【樹崎】

ちばてつや先生としても、もっと若い人に意見を求めているんだよね。本当は若い漫画家さんが声を出さなきゃいけないんだけど……若い人は飯を食うのに精一杯で、影響力のあるヒット作家は時間がないんだよね（笑）

漫画家ほど、時間がない職業あんまりないんだよね。そうして漫画界では椅子取りゲームが始まって……椅子が減る一方だけど、何もできずにいるっていう人が多い現状ですよ。

【ヒカル】

漫画家をサポートできる人が必要なワケですよ。それが恐らく、現状では赤松先生くらいしかいないのかもしれませんが（勿論、僕が知らないだけで他にもいるかもしれませんが）。ただ、そういう人材には法律にも精通した知識や弁論術も必要になってきますから難しいですよ。そういう人は一般でも多くないですし。

Q：新人さんへ向けたメッセージ

【ヒカル】

では最後に、新人さんに「こういう風に行きていってくれ！」……というメッセージを頂いてもよろしいでしょうか？

【樹崎】

うーん。各自、自由に生きてもらえればいいんですけどね（笑）
僕の時代と今の時代は随分、人間性が違うと思うので。今の時代の子は確実に性格が良いし、幸せに育ってます。僕らの時代のはろくでもない子もいっぱいいましたから。

【ヒカル】

今は学校の窓ガラス割るような子は減りましたね。
一部の学校とかにそういう子が集合してはいますけど。

【樹崎】

子供の性格とかは昔に比べて桁違いに良くなってますよ。それはとても良い事です。そうになると、モノの考えも変化していて近頃ヒットする漫画でも僕には理解できない作風の作品も増えましたけど、それはドラマも規模が小さいんですよね。

「俺の人生のがドラマチックだぞ」とか思いはするんですけど、それはそれでいいんです。今の時代に必要とされているモノだと思うので。そういう意味では僕もジジイになったなあと思うんだけど（笑）

でも、まだ世界戦線から考えれば僕の方が新人さんよりも欲されていると思うんで前向きですが（笑）

【ヒカル】

若者も先生に負けないように、必要なことを学んでいけば自ずと良い風が変わっていくということですね。

【樹崎】

専門学校や大学に行けば良い先生・悪い先生がいて、出版社に行けばまた色んな編集さんもいるんだけど……自分の一番芯になっている本質の部分は譲らないでもらえたらと思いますね。

——以上、樹崎先生からの貴重なインタビューでした。

先生、本当にありがとうございました！

ボーナスストラック

樹崎先生、貴重なお時間を割いて下さり誠にありがとうございました！

以下はボーナスストラックとでも言いますか、インタビューを敢行した漫画空間にて樹崎先生と店長である深谷陽先生を交えた雑談になります。

【ヒカル】

漫画空間では色んな先生がお客様として、お見えになってるんですか？

【深谷】

そうですね。数で言えば、一般の方が大半ですけど有名な作家さんも来ています。

『アオイホノオ』の島本和彦先生や『うしおととら』の藤田和日郎先生もご来店いたしました。両先生とも開店前にフラッと来てくださった感じですけどね（笑）

【樹崎】

ここのお店の不安点としてはプロの方が沢山来てくださっている反面、一般の方が来店しづらくないか心配なんだよね（笑）

皆さん、もっと気軽に遊びにきてくださいね（笑）

【深谷】

よろしく願いいたします（笑）

【ヒカル】

僕は関西から来て、ネットの画面上で見ていた漫画空間に来て感動です。関西はあまりこういうお店がないので。

【樹崎】

関西にも漫画空間できるんじゃないかって話はあるけどね。ホームページにも大阪店用の画像を貼るところは用意してあるし。まだ分からないけど。梅田か日本橋か、それ以外かで意見が分かれていますね。

【深谷】

あっ、そうなんですか？

【樹崎】

関西の人は分かるけど、梅田って便利なんだよね（笑）

梅田以外の大阪だと神戸や京都からのお客さんが来づらくなる。梅田より南になると、神戸や京都の人は一気に来なくなる。

【ヒカル】

現状では関西の方は外で原稿を描く風習はあまりないでしょうね……。

なので漫画空間みたいな場所があると嬉しいです。

【樹崎】

まあここら辺は追々ですね。

お菓子を片手にペン入れをする深谷先生を見て——。

【ヒカル】

……片手でケーキを食べながらペン入れを作業する漫画家さんって初めてみました（笑）

【樹崎】

日本で3番目に絵が上手い漫画家さんだからね。これぐらいしますよ（笑）

【深谷】

だから～（笑）

6番目ですって（笑）

【樹崎】

このネタ、2人で打合せして考えたんだよね（笑）そういう売り出し方にしようって考えてたんです。まあ絵がうまい下手に順位は本来ないですから。

漫画元気発動計画お馴染みのネタのルーツが明かされた瞬間である。

【樹崎】

それでも普通に深谷さんは絵がうまくて器用ですから。お菓子片手でも作業するぐらいじゃないですよ。昔は片手でタバコ吸いながら、作業する人もいたけどね。石ノ森章太郎先生もそうだったらしいし。

【ヒカル】

漫画家さんってタバコ吸いますか？

【深谷・樹崎】

いやあ吸わない人ばかりですね。

【樹崎】

少ないですね

【深谷】

減ってますねえ～。

【ヒカル】

漫画界も禁煙の流れがあるんですねえ。僕も吸わないんですけど。

【ヒカル】

深谷先生は元々、特殊メイク出身の方だとお聞きしましたが、もう特殊メイクの世界に戻る気はないんですか？

【深谷】

ないですねえ……。漫画界は色んな作家に色んな需要がありますけど、特殊メイク界はひと握りの天才がいれば大丈夫なんです。人材が多い必要はないんです、特殊メイクは。

【樹崎】

漫画界は平凡な作風の間人でも凄まじい技量を持った人間でも生きていける幅の広い業界ですからね。

【深谷】

教本でイラスト描く漫画家もいますから、生きる道も色々用意されている業界ですね。

【ヒカル】

絵が描ければ誰にもチャンスがありますよね。

【樹崎】

深谷さんみたいに漫画を書きながら、店長するのも新しいスタイルですよ。

【ヒカル】

深谷先生が目標とする作家さんってどんな方がいますか？

【深谷】

目標というか山田章博先生や安彦良和さんのイラストや漫画ですね。あのクラスの人になると、単に描くのが上手いのではなく他にも意図があるんですよ。画面構成から歌さえ聞こえてきそうな予感さえある絵なんです。

コップを持ち上げる深谷先生――

これを描くのが上手い人はごまんといいます。でも、この背景に何かを描いて、ただのコップ以上の意味合いを持たせることができる人はひと握りなんです。山田先生とかはどこから見てもカッコイイ絵ですから。

【ヒカル】

はあ～、僕なんかには想像のつかないレベルが高い次元の話……ですね。目がテンです。

そこに来店するお客様。

【深谷】

あつ、いらっしやいませ！

【樹崎】

深谷先生、大変だなあ。

さらにさらに番外編

【ヒカル】

前々から聞いて見たかったんですけど、いいでしょうか？先生たちの話ではないんですけども……。

【樹崎】

はいはい。いいですよ。

【ヒカル】

漫☆画太郎先生っていらっしゃるじゃないですか？

画太郎先生って何者なんですか？凄く特徴のある作家さんなので気になって……。でも何者なのか昔から謎で。

【樹崎】

漫☆画太郎先生好きな漫画家の人多いと思いますよ。僕も好きですよ。僕がジャンプデビューする少し前にいきなり現れた作家さんですね。画太郎先生のところにはアシスタントに行けるはずだったんだけど、自分の仕事が入って行けなかったんですよ。

【ヒカル】

どんなに滅茶苦茶な作品を出しても、すぐに連載までたどり着くので業界の人から凄くされてる作家さん何だなあと感じます。

【樹崎】

自分でスタイルを作り上げた人なので、そういう人には仕事が舞い込んできますよね。

【ヒカル】

本当にどんな雑誌にも呼ばれますよね。作品内ではかなりハチャメチャなことしてるのに、あれだけお仕事があるのは凄い。普通にキャラの首が飛んで死にますもんね（笑）

【樹崎】

かなりテキトーなことはしてるんですけどね（笑）

コピーとか使いまくってますし（笑）

【ヒカル】

けれど画太郎先生の漫画『珍遊記』は最新作のジャンプのゲームに登場しているあたり、本当に愛されてるんだなあと感じますね。

良い意味でジャンプから浮いてる作家さん……といただきますか。

【樹崎】

ジャンプ黄金期の作家さんは皆、個性があって浮いてるからね。

【ヒカル】

画太郎先生の絵は見た瞬間に

「あっ、画太郎先生が連載してる」って分かりますし。

【樹崎】

それに比べると、今の新人は個性がないのかもしれないけどね。

ジャンプらしさを求めすぎて個性を失っている気がする。編集に言われなくても。革新的なことをしてきたのがジャンプですからね。

終わり——。

ヒカルの編集後記……

『漫画家・アシさんに聞いてみた』第2弾いかがでしたでしょうか？

前作から約2ヶ月ぶりに新刊を出せました～（ホッ）

皆さんから大きな反響を呼びまして、めでたく前作は2000人以上の方々に読まれ、中には「面白かったよ」と感想までくれる人がいました。いやぁホントに嬉しい。

これもインタビューに答えてくださった漫画家さんやアシスタントさんのおかげです。本当にありがとうございます。

まだまだ閲覧数が伸びていまして、現在ダウンロード数とサイト上での閲覧数を合計すると2300部くらい売れてます。無料での公開なので売上というべきか、閲覧数というべきか迷いますが……まあ売上でよいでしょう（笑）

売上2300部突破！の方が言葉の響きの的に好きなので、ツッコミはなしの方向でお願いします（笑）

さて、何はともあれ第2弾が完成し

現在このように公開されているのであります。

第3弾がいつになるのやら分かりません。

今回のように2ヶ月後かもしれませんし、もっと時間が掛かるやもしれません。

本書が明日の漫画業界を背負っていく漫画志望者や漫画業界に携わる方々に刺激を与えるものであり続けるよう……私もインタビューを続けて参ります。

これからも原則、無料で公開を続けることにいたしました！

「おいっ！俺にも意見を言わせろ！」という意見もお待ちしております。

何かありましたら、私のツイッターアカウントまでどうぞ。

↑私のアカウントです。

次のインタビューについては4月1日現在、まったくの白紙です。
頑張ろう、俺……。

あっ、そうそう漫画業界インタビューの他にも
就活インタビューなども始めました、よろしければ一読を。

じゃあ、また！
近いうちに会いましょう！

これからも私はインビュアーとして、いや何よりも
漫画読者として漫画界の発展を望み……また応援します。

2014年4月2日

ヒカルより